SPECIAL STORY
TALES OF PHANTASIA®
テイルズ オブ ファンタジア
はるかなる時空(とき) 下
矢島さら
ファミ通文庫

矢島さら
Sara Yajima

1961年、横浜市生まれ。ジュニア小説、恋愛小説、エッセイなどを手がけるほか、麻宮筌の名で、ファンタジー小説でも活躍。また、かえるを心から愛してやまない「かえる友の会」会員として、精力的に活動中。主な著作に『あなたがそばにいるだけで』(福武文庫)他、多数。

松竹徳幸
Tokuyuki Matutake

アニメーション制作会社「プロダクションI・G」を通じて本編であるプレイステーション版「テイルズ オブ ファンタジア」OP・ED部分の作画監督を務めたフリーのアニメーター。おもに携わった作品に、「テイルズ オブ デスティニー」OPなどが上げられる。

カバーイラスト　松竹徳幸

テイルズ オブ ファンタジア

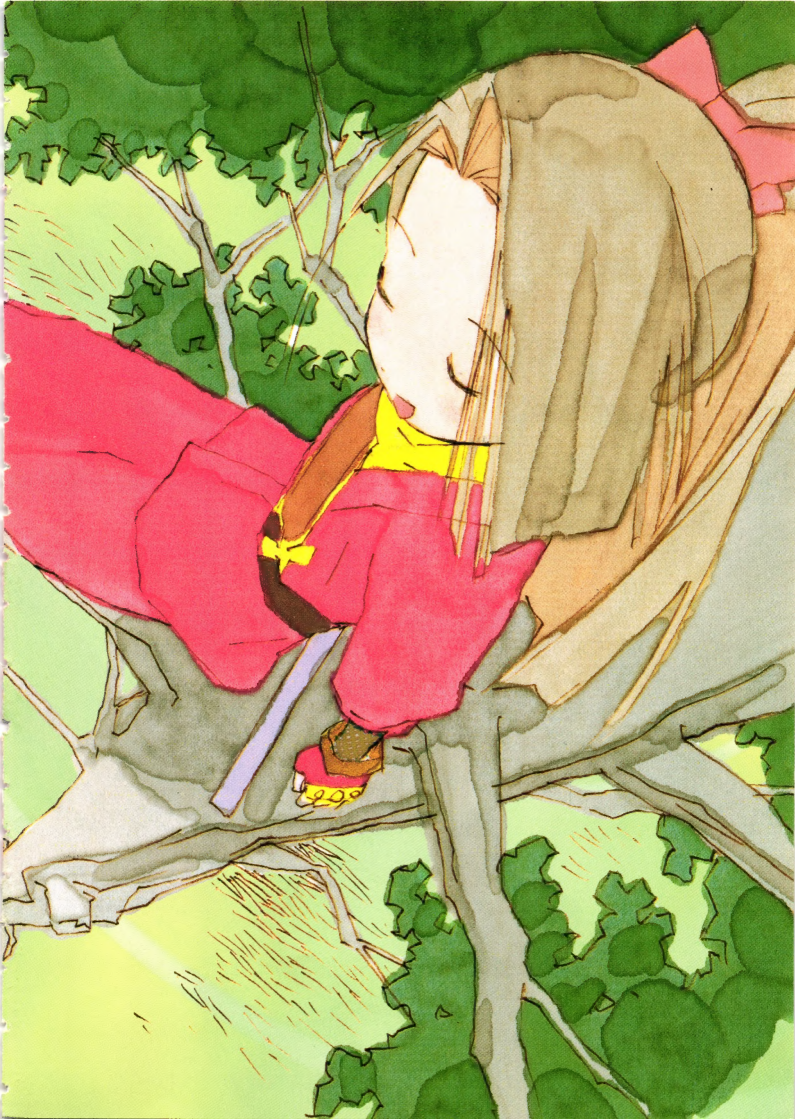
はるかなる時空(とき)㊦

矢島さら

TALES OF PHANTASIA®

はるかなる時空(とき) 下

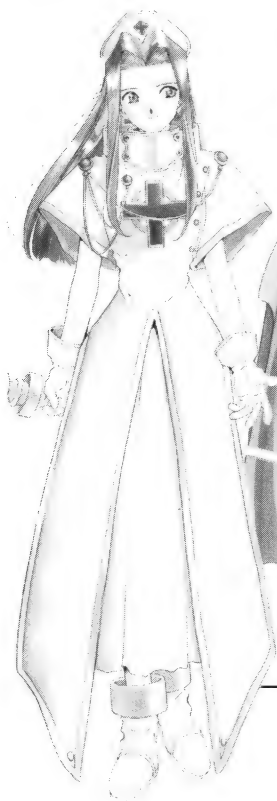
テイルズ オブ ファンタジア

はるかなる時空(とき) 下

矢島さら

FB
Famitsu Bunko
ファミ通文庫

主な登場人物

クレス・アルベイン

●年齢:17歳　●身長:170cm　●体重:59kg
本編の主人公。優しく非情になりきれないところが剣の甘さに出るが、仲間はそんなところに引かれている。

ミント・アドネード

●年齢:18歳　●身長:162cm　●体重:42kg
控えめでおとなしいが、怪物を相手に一歩も引かない気丈さを持つ。法力と呼ばれる癒しの力を使う法術師。

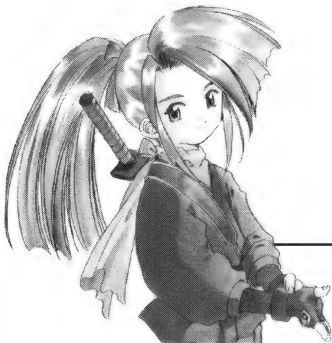
アーチェ・クライン

●年齢:17歳　●身長:157cm　●体重:39kg
喜怒哀楽を感じたままに表に出す。普段は活発・快活でうるさいくらい。エルフと人間のいわばハーフ少女。

クラース・F・レスター

●年齢:29歳　●身長:176cm　●体重:62kg
冷静沈着で、人見知りが激しい性格。魔術を使えぬ人間であるため、それに匹敵する召喚術を研究、体得する。

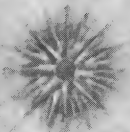
チェスター・バークライト

●年齢:17歳　●身長:175cm　●体重:62kg
クレスの親友。少し皮肉屋のところがある。でもこれは、大人と対等に渡り合うためにつけた癖。決断は早い。

ふじばやし　すず

●年齢:11歳　●身長:135cm　●体重:28kg
忍者の隠れ里にすむジャポン民族の末裔。里全体のことを第一に考えるけなげな性格。祖父が長を務める。

アセリア歴四二〇二年

ダオス城
白樺の森
ヴァルハラ平原
ミッドガルズ
12星座の塔
モーリア坑道
熱砂の洞窟
オリーブヴィレッジ

浸食洞
ベネツィア
西の孤島
ハーメル
ローンヴァレイ
ユークリッド
アルヴァニスタ
精霊の洞窟
エドワード邸
ベルアダム
精霊の森
水鏡ユミルの森

『テイルズ　オブ　ファンタジア　はるかなる時空(とき)』下巻

目次

第五章

ミッドガルズ城は間近に迫り来るダオス戦のために、極度の緊張を強いられていた。
極秘作戦会議のあと、クレス・アルベインたちは、城内に与えられた部屋でじりじりしながらクラース・F・レスターが戻るのを待っていた。
「あっ、クラースさん！」
ドアが開くなり、ミント・アドネードがさっと立ち上がる。
「どうでした」
クレスの問いに、クラースは珍しく肩をすくめてみせながら、
「ああ、終わったよ。危険とはいえ、重要な任務だ。それをよそ者が任されるものだから、やっぱり他の部隊長たちも最後まで面白くなさそうな顔つきだった」
と、あいていた椅子にドサリと腰を降ろした。
クラースは会議のあと、さらに特殊部隊長だけを集めた精鋭会議に出席していたのだ

った。
彼は第四特殊部隊長だから、第一から第三部隊までの隊長と顔を突き合わせてきたことになる。
「つまんないこと気にするよねぇ。勝てればいいじゃん？」
アーチェ・クラインがため息まじりにくちびるを尖らせた。彼女は後ろ向きに腰かけた椅子の背を抱き、
「で、具体的にはどういうことだったの」
と、訊ねる。
「そいつについては宿で話さないか。出発は明日の早朝だから、ここからいちばん近い宿に部屋をとろう。どうもここは落ち着かない」
クラースは部屋の中を見回しながら、さっさと立ち上がってドアまで進んだ。
「え、でもクラースさん、ライゼン騎士団長はここに泊まるようにって……」
「クレスさん」
ミントがそっとクレスの袖を引っ張った。
「クラースさんのいう通りにしましょうよ。突然重大な任務を仰せつかって、大変なんですから」

「……ああ」
アーチェがぴょんと椅子から降りる。
「お城のごはんのほうがきっとおいしいよ。楽しみにしてたんだけど、まあいいや」
四人は廊下へ出、ライゼンを探したが見つからなかった。衛兵に訊ねてみると、
「武器庫か格納庫でしょう」
という。
明朝必ず戻るからと伝言して、クレスたちはものものしい空気に満ちる城をあとにした。
「いいか？　よく聞いてくれよ」
クラースが大陸図を広げる。
幸いなことに、宿の四人部屋が空いていた。クレスたちはさっそくテーブルを囲んでいた。
「この国の北東に位置する島……ここにダオスの居城がある。島と大陸をつなぐ道は、わずかに橋がひとつ。ここが重要拠点になると、ライゼンはみている」
「なるほどね。でもこの橋まで、けっこう遠いですよ」

クレスは地図の距離を読みながら、クラースを見た。
「そう。ここに我が軍の主要部隊が到着するまでに、最短距離をとったとしても……」
「四日……ううん、五日はかかるよね」
アーチェが引き取った。クラースが頷く。
「だが五日もかけていては敵方に橋を越えられてしまう。そこで、だ。我々少人数による四つの特殊部隊が動き、敵を撹乱、足止めをさせようというわけさ」
「具体的にはどうするんですか」
ミントが訊ねる。
「俺たち第四特殊部隊はヴァルハラ平原の探索だ。潜んでいる敵をせん滅する」
なあんだ、と声をあげたのはクレスだった。
「特殊っていうからもっと変わったことをするのかと思ったら、それって僕たちがふだんやってるようなことじゃないですか」
「ああそうさ。ミッドガルズ軍に俺たちの実力を見せつけてやる絶好のチャンスってわけだ。だが、油断は禁物だぞ。なんてったって相手はダオスの魔物軍団なんだからな。今夜中に周辺の地形を頭に叩き込むんだ」
クラースの言葉の厳しさに、クレスたちはじっと地図を見つめて頷いた。

緊張しながらも、なんとかクレスたちが眠りについたころ。深夜というのに、魔科学地下研究所の格納庫への降り口にはライゼンの姿があった。
「いよいよだが、装置の調子はどうだ？」
「はっ。きわめて良好、いつでも発射可能であります」
眼下に安置されている巨大な装置を目の端で捉えながら、傍らの技師に問いかける。
「よし。この魔導砲があればダオスなど……ふふふ……」
技師の返答に、ライゼンは満足そうに頰を撫でた。

短かい夜が明けた。寝起きの悪いアーチェをひきずるようにして城へ戻ったクレスたちを庭で待ち受けていたのは、他の特殊部隊長たちだった。
「これはこれはクラース殿、お早いおでましで」
第一特殊部隊長のリチャードが皮肉る。
「まだ時間ではないはずだが」
冷静なクラースに、マコーレイとカークウッドはわざとらしい目配せを交わした。それぞれ第二、第三特殊部隊の隊長である。

「クラース殿はご存知か。この作戦でいちばん活躍した者に、我が王から褒賞が与えられるそうな」
「その奇抜な風体では、さぞ目立つことだろうよ。しかも聞き及ぶところによれば、怪しげな術まで使うとか……これはもう褒賞は貴公のものということですかな」
ふたりは低く笑いあった。
「なにさ、やな感じ。んべーだ」
アーチェが舌を出したとき、ライゼンが庭に現れた。数百人はいると思われる歩兵を率いている。
「諸君！　お待たせした。これより作戦を遂行する！　各部隊、決められたルートでの成果を期待しているぞ！」
「はっ！」
リチャードたちは、もうひとこともムダ口をたたくことはなかった。
クラースも割り当てられた兵たちに合図をすると、平原を目指して出発した。
「だんだん寒くなってきたな」
見渡す限りの平原を進みながら、クレスはくしゃみをした。

ほうきに乗って飛んでいるアーチェも、ぶるるっと身震いする。
「ああ、灼熱のオリーブヴィレッジが恋しいなあ」
「アーチェさんたら。暑いのが苦手なくせに」
ミントが薄く笑う。
やがて草地にさしかかった。遮るもののない平原で長く伸びた草は、クレスたちの足を鈍らせる。
「気をつけろ！　敵が潜んでいるかもしれない。アーチェ、後ろの兵たちにも注意するよう伝えてきてくれ」
クラースが言うと、
「了解！」
アーチェは、ほうきの先をツイッと反転させて飛んで行った。
それを見送っていたクレスが、前方に視線を戻そうとした、そのときだった。
「クレスさん、伏せてっ！」
ミントが叫んだ。
ビュッ！
「うわっ⁉」

何者かにいきなり斬りつけられ、クレスは危ういところで草の中に跳び込む。
「こいつっ！」
立ち上がりざまにグーングニルで突くと、カシャンという音とともに、やけに軽い手応えがあった。
(なんだ、こいつは)
敵は黒いローブを身に纏(まと)っており、深くかぶったフードから、白い骨が覗(のぞ)いている。
クレスは剣を抜いた。
「ガイコツめ……虎牙破斬っ！」
二度の攻撃で、モンスターはあっけなく倒れた。が、それを待っていたかのように、草の中から次々と黒いローブが立ち上がる。
「アーチェ、兵をこっちに！」
クラースが腕をふり回しながら怒鳴る。すぐに駆けつけた兵士たちがモンスターに向かってゆく。よく訓練された彼らがモンスターの屍骸(しがい)の山を作るのに、そう時間はかからなかった。
「さすがは特殊部隊に選抜されただけのことはありますね」
ミントが感心して言った。

いつのまにか草原に夕暮れが訪れていた。クレスたちはテントで野営をしながら、夜明かしをすることにした。
ときおり思い出したように現れるモンスターを倒しながら、少しも景色の変わらない平原を進み続け、早くも四日目が訪れた。
「ねえ、あたしたちってホントに役に立ってんのかな？」
アーチェは言いながら空を仰ぎ、真紅の瞳をぱちぱちさせる。
「あたりまえだ。もうすぐ橋に到達するぞ」
クラースは遥か前方を睨(にら)みつけた。そのとき、すぐ近くで割れ鐘のような声が響いた。
「ふはははははは！　待っていたぞ、ミッドガルズの腰抜けどもめ！」
「だっ、誰だおまえは!?」
クレスが向き直ると、そこには小山のような魔物の姿があった。二本足で立ってはいるが、その容貌は爬虫類を連想させる。
「トカゲの甲冑？……じゃなくて、あんた、そういうバケモノなんだ。気持ちわる〜」
アーチェがずけずけ言うと、魔物は、
「うるさい！　私はダオス陸軍部隊長イシュラントだ。この地を貴様らの墓場にしてやるから覚悟するがいい！」

と、いきりたった。
クレスとクラースは無言のままイシュラントを挟むように動いた。兵たちの間にもさっと緊張が走る。
「者ども、かかれ！」
イシュラントの背後から、モンスターがわらわらとわいて出た。すぐに兵が応戦する。
「俺たちはイシュラントを倒す！　行くぞ！」
クラースの言葉に、クレスは魔物の背後から斬り込んだ。
「秋沙雨！」
グワァァァアーっ！
イシュラントはもがき、クレスを振り返ったが、アーチェがそのタイミングを捉えた。
「サンダーブレード！」
魔物の巨体が地面のまわりに落雷が生じる。すかさずクラースが精霊を召喚した。
「マクスウェル！」
いくつもの光の球体が激突し、イシュラントの硬い皮膚を粉微塵に噴き飛ばした。
「やった」
(手下のモンスターどももあらかた片付いたようだ)

クレスは、ふとミントの姿が見当たらないのに気づいて慌てたが、彼女は草むらにしゃがんで、傷ついた兵士をひとりずつ法術で癒しているところだった。
「よし。陸軍部隊長を失っては、敵もしばらくは動けまい。みんな、城に戻って報告だ」
クラースが高らかに号令をかけた。

ミッドガルズ城の謁見の間では、上機嫌の国王がクレスたちを迎えてくれた。イシュラント撃破の報せを受けた他の特殊部隊長たちもすでに戻っている。
王はクラースを見るなり玉座から身を乗り出した。
「大役を見事果たした勇者たちよ。そなたらの働きにより、我が軍はすでにヴァルハラ平原を制圧することができた。礼をいうぞ」
「はっ」
クラースはうやうやしく頭を垂れた。
「そなたたちに褒賞を与えようと思うが……」
「せっかくですが、国王」
クラースが言いかけると、リチャードが口をはさんだ。
「遠慮はなしだぞ、クラース。いや、俺たちが悪かった。貴公たちは実際たいした勇者

だよ。我々の部隊は少しばかりのモンスターどもを血祭りにあげた程度で終わってしまったのだからな。どうか今までの失礼を許してほしい」
クラースは「いいんだ」とリチャードに片手をあげてみせ、すぐに国王に向き直った。
「国王。私が申し上げたいのは、喜ぶのはまだ早いということです。我々はダオスの手下のひとりを倒したに過ぎません。肝心のダオスがまだ……」
そのとき、バタバタという足音を立て、ひとりの衛兵が転がり込んできた。
「何事だ！　騒々しいっ！」
王のそばに控えていたライゼンが兵を叱りつける。
「も、申し上げますっ。国王、て、敵が、敵が攻めてきますっ！」
(なんだって!?)
クレスは、ミントと顔を見合わせた。
「馬鹿な。すでに平原は我が軍の手にあるはずだ！」
ライゼンが叫ぶと、兵は蒼白なくちびるを震わせながら告げた。
「そ、それが空からなのです……」
「なんと、今度は空中部隊か。ライゼン、どうしたものか」
王の問いかけに、騎士団長はすぐさま兵に指示を出す。

「すぐに投石器、大砲部隊を編成するんだ。それから、国王を安全な場所へお連れしろっ」
「はっ」
兵は入ってきたときと同じあわただしさで、謁見の間から姿を消した。
「ライゼン。わしはここに残る。民を置いてどこへ逃げろというのだ」
王はまっすぐにライゼンを見据えると、
「それより、よい機会ではないか。あれを使ってみてはどうだ」
と、顎をしゃくった。とたんに、ライゼンの目に強い光が宿る。
「御意。王のお許しが出たとあらば、今こそ魔科学兵器の力、ダオスめに見せてやりましょう」
不敵な笑みを浮かべたライゼンも出て行ってしまうと、クラースがくちびるを嚙んだ。
「まずいことになったたな」
「魔科学兵器って、例のあれでしょ。対ダオス用の究極の兵器っていう。どんなのかな～」
アーチェが首を傾げるのに、
「とにかく俺たちも加勢しよう。行くぞ！」

クラースは王に一礼して走り出しかけた。クレスがあわてて声をかける。
「ちょっと待ってください、クラースさん。空から来られたんじゃ僕たちには応戦のしようが……」
「それでも行くんだ！」
「けど」
クラースはもうクレスを振り返らなかった。

城の前庭に出たとき、突然、なにかで抉（えぐ）られるような痛みがクレスの頭を襲った。このところときどき起きていたものより、ずいぶん強い。
（うっ、まただ……こんなときに！）
キィーンという耳鳴りと共に、あの声が頭の中に響き渡った。
〝若き剣士よ！　分不相応なものを持つでないぞ！〟
「……」
クレスはふらふらと先を歩いていたミントの前へ出、さらにクラースに並ぶ。
「おい、クレス！　どこに行くんだ」
「声が……女の人の」

彼の目は宙を見つめ、足取りはおぼつかない。
「クレスさん!?」
ミントが叫んだ。ゆっくりとクレスが振り向くのと同じ速度で、彼の体は、消えた。
「ひええっ、クレスが消えちゃった!?」
アーチェが素っ頓狂な声をあげる横で、
「そんな……」
ミントがどさりと倒れて気を失った。
「きゃーっ、ミント、しっかりしてよぉ！　いったいなにが起きたのっ」
ミントの体にとりすがるアーチェの横を、城に残っていた兵士たちの軍靴が駆け抜けて行った。

どれくらいの時がたったのだろう。ハッと我に返ったクレスは、自分が見たこともない古風な部屋の中に立っていることに気づいた。
(僕はいったい……ここはどこだ。まさかひとりだけまた時空転移しちゃったんじゃないだろうな)
そのとき、部屋の奥の祭壇の上からじっとこちらを見つめる視線を感じ、彼は体を硬

くした。

「誰だっ！　ダオスの手先かっ」

目をこらすと、祭壇の上にいるのは羽根をかたどった帽子をかぶった若い女だった。雪のように白い馬にまたがっている。女は美しかったが、クレスの問いににこりともせずに答えた。

「私はオーディーンに忠誠を誓う者。人々にはヴァルキリーと呼ばれていますが」

「オーディーン……ヴァルキリー？　さっぱりわからないけど、僕に何の用だ」

神具を返しなさい、とヴァルキリーはよく通る声を張った。

「おまえの持つ槍、グーングニルのことです。それはもともと我が主君オーディーンの持ち物。なのに下賤な人間どもが主君の墓から勝手に持ち出してしまった……おまえがそれをアルヴァニスタ王から手渡されたことも知っているが、おとなしく返せばそれなりの礼もしよう」

どうやらオーディーンというのは古代神らしいな、とクレスは思った。そういえば頭痛が始まったのはグーングニルを持つようになってからのことだし、頭に響く不思議な声のことも、考えれば納得がいく。

クレスはしっかりとグーングニルの柄を握りしめながら、ヴァルキリーの馬を見つめ

ヴァルキリーがかぶっている帽子は、この羽根をかたどったものなのかもしれない。
(羽根、か……)
「あのう、ヴァルキリーさん」
クレスはおずおずと口を開いた。
「あなたの乗っているその馬、もしかして飛べるんですか？」

そのころ、遥かユークリッド大陸の精霊の森では、大樹ユグドラシルがその枝を微かに震わせていた。
マーテルは、かつて力強く天を指していた太い幹を見下ろし、目を伏せた。
「なんでしょう、この感じ……いつにも増してユグドラシルが、衰えの予兆を……」
マーテルは深い悲しみとあきらめの混じった瞳で、空を見上げかけたが、すぐにまたうつむいてしまった。

「クラース殿、なにをしているんですっ。早く来てください！」
城門付近でぐずぐずしていたクラースに、駆けてゆく歩兵のひとりが叫んだ。
「し、しかし仲間が……」
「ねえクラース、仕方ないよ。あたしたちだけで先に行こ。ミントはあたしが運ぶから」
アーチェが言う。
「あ、ああ」
クラースはアーチェがまたがっているほうきに、抱き上げたミントの体を預けた。
(クレスのやつ、どこへ行ったんだ……)
クラースは後ろ髪を引かれる思いで、城門を出た。
平原の上空は、黒い幕で覆われたように見えた。ダオス軍の空中部隊、コウモリにも似た巨大な魔物がびっしり並んで滞空し、太陽光を遮っているのだった。
「な、なんだこれは!?」
クラースとアーチェは平原の入り口で思わずぽかんと口をあけてしまったが、そのとき、すぐ近くでバリバリと落雷が響き渡った。魔物の口から発せられたのだ。
ドオオォォォ————ン！

大地はめくれ上がり、そこで攻撃準備をしていた兵士たちとともに吹っ飛んだ。
「きゃ!?」
ミントがアーチェの背中でちいさな悲鳴をあげる。
「あ、気がついたね」
「……アーチェさん、こ、ここは？」
ミントは暗い空を訝しげに見上げて、また悲鳴をあげた。
と、背後から足音が近づいた。
「あ、ライゼンだ」
アーチェが傍らのクラースを肘で突つく。ミントはあわててほうきから滑り降りた。
「諸君！　待たせたな。我らが魔科学兵器、魔導砲の準備が整った！」
ライゼンはクラースたちのそばで立ち止まると、手に持った小さな箱を高く掲げた。
「あんなちっこいのが兵器なわけ？」
アーチェがばかにしたように言うと、ライゼンがじろりと睨む。
「これは通信機です。もっとも、現在の技術では四、五分しか持たんそうですが」
「へええ。さっぱりわかんない」
アーチェが眉を寄せたとき、通信機がガガガ……と濁った音をたて始めた。

『こちら地下研究所——ソーサルエナジーレベル九九・二%、レーザーオペレーションシステムオールクリア！　ライゼン殿、いつでも発射できます。ご指示をお待ちします』

「箱のやつが喋ったっ」

「すごいですね」

アーチェとミントが顔を見合わせている横で、ライゼンは威嚇するように羽ばたき続けている上空のモンスターどもをキッと見据え、

「よし、奴らをなぎ払え！」

と叫んだ。

『了解。発射——！！！』

クラースはアーチェとミントを守るようにふたりの前に出た。だが実のところ、城の地下にある兵器からこの平原にどうやって攻撃をしかけるのか、具体的なことはなにもわからない。

数秒後、突然上空が白く光った。ものすごい速さで放射状に伸びる閃光とともに、無数の魔物が消し飛んだ。

「す、すごい……これならダオスといえども、ひとたまりもあるまい」

クラースが手で目をかばいながら、唸る。

「はーっはっは！　見たか、魔科学兵器の威力を！」
高笑いするライゼンの腕を、だがアーチェがくいくいと引っ張った。
「あのー、まだモンスターのやつ、いっぱい残ってるけど？」
どうやら今の攻撃は、平原の手前半分くらいにしか及ばなかったらしい。ダオスの拠点近くにいた魔物が、無傷のままこちらへ向かってくるのが見える。
「む……」
ライゼンは咳払いすると、通信機に怒鳴った。
「おい、もう一発撃ち込めっ！」
『了解——うわあぁぁぁっ！』
「ど、どうしたっ!?」
『火、火を噴きました！　だめですっ。煙がすごくて……おわぁっ!!』
通信機からは、激しく咳き込む技師の悲鳴に混じって、非常事態を伝える断続的な機械音が流れてきていた。
「どうしました!?」
クラースがライゼンに駆け寄った。同時に通信機はザザザ——ッという不快な音を最後に吐き出し、それきり沈黙してしまった。

「くそう。あまりにも強力なソーサルエナジーに兵器が耐えられなかったのだ！　クラース殿、私はいったん研究所へ戻らねばならない。あとを頼みましたぞ！」
ライゼンは役に立たなくなった通信機をその場に叩きつけると、踵を返した。
「頼みましたぞって、あ、ねえ、ちょっと待ってよ」
あわてるアーチェの肩をクラースが掴む。
「科学で魔力を扱うなど、しょせん無理なことなのかもしれない。こうなったら戦うまでだ。俺たちも行こう」

精霊マーテルはぼうぜんと自分の白い手のひらを見つめていた。
まるで、見えない砂が柔らかな指の隙間からこぼれ続けているかのようだ。
「……マナが……、消えてゆく……」
ユグドラシルの葉がまた一枚、カサリと音をたてて落ちていった。

「くっそう、上から狙われたんじゃどうしようもないな！」

襲いくる魔物と戦いながら、クラースが怒鳴った。ミントとアーチェはそれぞれ杖とほうきを振り回すのに精一杯だ。
まわりの兵士たちも兵器が使えなくなったという情報を耳にし、動揺を隠せないでいる。形勢は不利だった。
「こんなとき、クレスさんがいてくれたら……」
ミントがつぶやいた、そのときだった。
唐突に、クレスが目の前に現れた。しかし彼が真っ白な馬に乗っていたため、とっさにはなにが起きたのかわからなかった。
「げっ、なにこれ!?　浮いてる」
アーチェがのけぞる。半透明の羽根が生えた馬の脚は、地上数十センチのところで宙を蹴り、あたりをひと周りしてすぐに戻ってきた。
「クレス？　あんたホントにクレスなの？」
「無事だったのか！」
クレスは馬上からクラースに頷いてみせ、
「心配かけてすみませんでした」
と謝った。

「その馬どうしたのよ？　かっこいいじゃん！」
「ペガサスだよ。手伝いを頼んだ……くわしい話はあとだ、アーチェ。僕はあいつらを一気に叩いてくる！　やつらはこっちが空を飛べっこないってタカをくってるはずだからな」
「んじゃ、あたしも行くっ」
「しかしそのほうきじゃ……途中で辛くなるぞ」
クレスが迷ったとき、ペガサスが理知的な黒い瞳をアーチェに向けた。
「私の力で長く高く飛べるようにしよう」
「ひええっ⁉　馬が喋ったっ」
光の粉が羽衣のようにほうきを包み込み、すぐに消えた。アーチェが驚いて飛びすさる。
「き、きょうは箱が喋ったり馬が喋ったり、忙しいなあもう」
「ありがとう、ペガサス。クラースさん、ミント、行ってくるよ――！」
ペガサスはクレスが喋り終わらないうちに、高みを目指して舞い上がった。アーチェがあわててあとを追う。彼女が振り落とされそうになったほど、ほうきは確かに威力を増しているようだった。

空中では、突然姿を現したクレスに気づいた魔物たちが、群がるように襲いかかってくる。
剣を抜きかけたクレスをペガサスが鋭く制した。
「馬上戦闘で剣は使いものにならぬぞ。グーングニルを使え！」
「わかった」
クレスはすばやく持ち替えた槍で、急降下してきた魔物の横腹を突いた。
ギャアアアァァァ――――ッ！
魔物はまっさかさまに墜落する。ペガサスの上から覗き見る地上は、足下に広がる雲のために霞んでいた。
「サンダーブレード！」
アーチェが高みから落雷を生じさせた。さらに追い討ちをかける。
「レイ！」
魔物たちは灼かれ、炎のかたまりとなって落下した。
ドオォォォ――――ンッ！
地上に激突するたびに大音響が大気を震わせる。

アーチェが平原の上をくまなく飛びまわり、クレスがかろうじて生き残った魔物にグーングニルでとどめを刺し続けるうち、やがてヴァルハラの地に陽射しが戻った。
「もういいだろう、クレス。すっかり片付いた」
ペガサスは背中に乗せた剣士にそう声をかけると、一直線に駆け降りた。
「ありがとう。あなたのおかげだよ」
地上に降り立ったクレスは、ペガサスのたてがみにそっと触れ、微笑(ほほえ)みかけた。
「私はあるじからの任を全うしたにすぎない。約束だ、グーングニルを返してもらうぞ」
クレスが槍を差し出すと、ペガサスは大切そうにそれをくわえ、ふたたび舞い上がる。
「さらばだ！」
いつの間にかクレスの横に降りたっていたアーチェが、バイバイ、と手を振った。
「おりこうさんな馬だったねぇ。お父さんのところにいる農耕馬とは大違いだよ」
彼女はそう言うと、なつかしいローンヴァレイを思い出したのか、くすりと笑った。
クレスは、まだもうもうとしている土煙の向こうから、こちらに走ってくるふたつの人影を認めた。
「おお、よくぞ無事で！」

戻ったクレスたちを城門で迎えたのはライゼンだった。
「兵器は無事でしたか」
クラースの問いに、ライゼンはしきりに恐縮し、
「いや、まことに面目ない……まだまだ改良の余地があるようだ」
と、頭を下げた。
「ともかく今日のところはゆっくりしてくれ。王もいたくお喜びのことであるし……すぐに部屋を用意させよう」
「いや、お気遣いなく。私たちは気楽な宿のほうが落ち着くので、そちらへ戻ります」
クラースはそう断ると、城へは入らずに歩き出した。

宿に着くなり、四人は打ち合わせをしたかのようにベッドへ潜り込み、真夜中近くまでひたすら眠った。目を覚ますと、あらかじめ用意しておいてもらった軽食をとりながら、今後のことを話し合った。
「とにかく、俺たちは平原とダオスの城をつなぐ橋すら渡らずに戻ってきてしまったってわけだ」
クラースが面白くなさそうに薫製の肉をかじる。

「だったらあたしたちだけで行こうよ」
アーチェはお茶のカップに砂糖を入れながら、クレスに「ねえ」と同意を求めた。
「アーチェさん、お砂糖……五杯目ですよ」
ミントが目を丸くする。
「うん。だって疲れると甘いものが欲しくなるじゃん？　これにミルクをたっぷり入れて、パンを浸して食べるとおいしいんだから。ためしてみる？」
「わ、私はけっこうです」
「相変わらず食が細いなあ、ミントは。そんなんじゃ将来立派な赤ちゃんが産めませんことよ」
「アーチェさんたら」
ガタン、と音をたてて立ち上がったのはクレスだった。くちびるの端にパンくずがついている。
「よし、いまからダオスの城にのりこもう!!」
「これはまた威勢がいいな」
クラースが大げさに驚いてみせる。
「だが、なんでそんなに真っ赤になってるんだ？」

短い夜が明けかけていた。陽がのぼる前の冷気は、クレスたちを刺すようだった。
ふたたびヴァルハラ平原を進むこと数日、彼らはようやくダオスのいる島へと続く長い橋にさしかかった。橋は堅固な石でできており、あたりにたち込めている霧のせいで黒く濡れ光っている。
「ずいぶん静かですね」
ミントの声が、静寂に吸い込まれてゆく。
(本当にここにダオスがいるんだろうか)
クレスは不安になりながら、一歩一歩、ブーツの先で橋の感触を確かめて進んだ。
ふと、空気の流れが変わった。すばやく顔をあげたアーチェが叫ぶ。
「あっ、あれ見てっ。お城だ！」
霧の晴れ間から姿を現したのは、確かに巨大な城だった。だが、アルヴァニスタ城やミッドガルズ城と違い、訪れるすべての者を拒絶した、ゾッとするような雰囲気に満ちているのだった。
「陰気な城だなあ」
クレスはつぶやいた。クラースも頷く。

「みんな、気をつけろよ。ここまで何事も起こらなかったのは、ダオスがこちらの出方を窺っているからに違いないからな」
もうあとほんの少しで橋を渡りきるというとき、
「なにか聞こえませんでしたか」
と、ミントが足を止めた。
「別に、なにも……うわあっ！」
クレスは、突然、拳大くらいの黒いものが足の甲に乗ってきたのに気づいて、跳びあがった。
「く、蜘蛛？」
霧の中から、無数の蜘蛛がキシキシと不気味に鳴きながらわいてくるのだった。
「きゃっ」
「ミント、早くあたしのほうきに乗って！　こぉんな蜘蛛、みんな焼き殺してやる」
アーチェが呪文を唱えようと口を開きかけた、そのとき。
「もういい。さがっていろ」
前方から低い声が響いた。蜘蛛たちがさーっと城のほうへ戻ってゆく。
「お、おまえは……ダオスっ!?」

霧の中で、見覚えのある美しい金髪が波打つのが見えた。クレスはとっさに走り寄ると、立ちはだかるダオスに剣を突きつけた。だが、かんじんのダオスは微動だにしない。それどころか殺気すら孕(はら)んでいないようなのだ。
(……え⁉)
クレスは拍子抜けして、思わず剣をおろしてしまった。
ダオスは、クレスとミントの顔を順番に見て言った。
「久しぶりだな。しかし、私にはおまえたちと戦う理由がない。なぜ私に剣を向ける?」
「ふ、ふざけるなっ！　おまえになくてもこっちにはあるんだ！　忘れたとは言わせないぞっ」
すると、突然ダオスが笑いだした。
「ははははは！　おまえたちもミッドガルズの手先と成り下がったというわけか。無益な殺生はするまいと思っていたが、降りかかる火の粉は振り払わねばな」
ダオスは一瞬クレスを睨みつけ、そのまま背を向けた。
「待て、逃がすかっ！」
「あたしにまかせてっ。ペガサスがパワーアップしてくれたこのほうきで本気をだせば……??」

アーチェは「ひえ～ん」と情けない声をあげる。ヴァルハラ上空を飛びまわったときのスピードとパワーが、すっかり失われてしまっていたのだ。
「元に戻っちゃってるよぉ。あん、クレス、ミントっ、クラースも待っててったらっ！」
アーチェはあわてて霧の中に突っ込んでいった。

城の内部は暗く、意外なほどがらんとしていた。調度品の類いはまったくといっていいほど置かれていない。
（ダオスはひとりでこの城に？）
クレスは、敵の孤独な生活をいきなり目の前に突きつけられた気がして、とまどってしまう。
（いや、今はそんなことどうだっていい）
ギギギィッ！
斜め上から襲ってきたモンスターを斬り捨てながら、クレスは走った。
「ここの雑魚どもは私が引き受ける。奥を探せ、クレス！　見つけたら呼んでくれ」
クラースは、わらわらと集まってきた種々雑多なモンスターを相手にすべく印を結び、クレスの背に叫んだ。

「わかりました！」
広間から続く階段を駆けのぼり、手当たり次第に扉を開けてまわる。
「ダオス、どこだ!?　出てこいっ」
いちばん奥の扉をバン！　と押したクレスは、そこに抜き身の剣を手にしたダオスの姿を発見した。
「来たか、小僧」
ダオスは不敵な笑みを浮かべ、肩をそびやかした。
「おまえ……おまえのせいでトーティス村の人々や、僕の友人たちがどんな目に遭ったか、わかってるのか!?」
「ふふふ。わかっていないのは小僧、おまえのほうではないかな？」
「どういう意味だよっ」
クレスはキッと美しい男を睨みつけた。
「傷を受けるには受けるだけの理由があるということだ。それを忘れて私怨を晴らすためだけに、この私と戦うなど……笑止！」
「黙れっ、いくぞ！　虎牙破斬っ!!」
ガキッと音をたてて、ダオスの剣がクレスを阻む。ふたりは剣を交えたまま、動かな

かった。
「くうっ」
「ふふ、まだまだだな」
息がかかるほどの距離で、ダオスが微笑んだ。
「……教えてほしいんだ、なぜこんなことを……人々を苦しめるのか」
「残念だな、小僧」
「え？」
その瞬間、クレスはバランスを失ってつんのめった。
「こ、これはいったい……!?」
ダオスは、消えていた。

すっかり霧の晴れた橋のたもとで、クレスたちはぼう然と顔を突き合わせていた。
「せっかくここまで追いつめたのに、逃げられるなんてさあ」
アーチェがため息をつく。
「ごめん……まさか消えるなんて思わなかったんだ」
「クレスさんのせいじゃありませんよ」

ミントは、以前ベルアダムの村長にもらった地図をガサガサとひろげているクレスをかばった。彼が自分を責めているのが、痛いほど伝わってくる。
「ムダだよ、クレス。ダオスはその地図の中にはいないさ。おそらくやつは時間を超えて、どこかの時代に逃れたに違いない」
クラースが遥かヴァルハラ平原の向こうを透かし見ながら言い放った。
「時空転移したんだよ、ダオスは」
クレスはハッと顔をあげた。
「時空転移……じゃあ僕たちにはもう追いかけようがないってことですか」
クラースは答えず、クレスの持っている地図を覗き込むとある一点を指さした。
「ここへ行ってみるしかないだろうな」
「ん？　アルヴァニスタじゃん」
アーチェがクラースの横から口をはさむ。
(そうか！　ルーングロムさんに相談すれば、なにかいい知恵を授けてもらえるかもしれない)
クレスはやっと口もとをほころばせると、
「行きましょう、アルヴァニスタへ」

と、クラースに力強く頷いてみせた。
魔法研究所では、ルーングロムが歓迎してくれた。
「待っていたんだ。いろいろ聞いているよ」
大変だったな、と彼はクラースの肩を叩いた。
ここはちっとも変わっていないな、とクレスは思う。雑多な魔法用品が詰め込まれた棚の前を、耳の尖った研究員たちが忙しそうに行き来していた。
クラースはダオスに逃げられてしまった話を簡単にしたあとで、あらたまった口調で、
「申し遅れましたが、エドワードさんのことは……」
と、頭を下げた。自分たちがローンヴァレイに行っていたために、エドワードが自爆魔法を使うことになってしまったのだと、クラースは深く悔やんでいた。
「おぬしたちが悪いわけじゃない。憎むべき敵はいま、別の時代でのうのうとしているんだろう？」
ルーングロムは自分の机から一通の封筒をとってくると、クレスたちに示した。
「実はモリスンが逝く前に、これを預かった。自分の身になにかあったら開封してほしいと言ってな。残念ながら、本当に封を切ることになってしまったが……」

彼はクレスに手を出すように言い、封筒を逆さにして振った。
(これは……?)
冷たい感触と共に手のひらにこぼれたのは、鈍く光る一本の鍵だった。
「どこの鍵ですか、これ」
ミントが首を傾げて訊ねる。ルーングロムはクレスたちひとりひとりの顔を見てから、立てた親指でドアの外を示した。
「モリスンの家へ行こう。話はそれからだ」

エドワード・D・モリスンの館は、主を失った今も、緑に囲まれひっそりと息づいていた。
「まあ、グロム様! それに、いつぞやの皆さんも」
エドワードの妻リリスは、驚きを隠さずに一行を迎えた。
「ごぶさたしております。エドワードのことはお気の毒でした……」
「いえ、それはもうおっしゃらないでくださいな」
リリスは気丈に微笑んでみせたが、目のふちがたちまち赤くなった。
「こんなときに申し訳ないのですが、彼の書斎に通してほしいのです」

「ええ、それはかまいませんが、でも鍵がかかっているんです。お掃除もできないんですよ」
リリスは泣き笑いの表情になったが、クレスが鍵を見せると、何度も頷いた。
「そういうことでしたら、どうぞどうぞ。書斎は二階です」
「ありがとうございます」
クレスは礼を言い、玄関脇にある階段を見上げた。
ルーングロム、クラース、クレスが階段を昇り始めたあとで、アーチェは小さな咳払いをひとつすると、リリスに囁いた。
「ずいぶん大きくなったね」
「え、わかります？」
リリスはうれしそうににっこりすると、エプロンの上から優しくお腹を撫でる。ミントは驚いて口もとに手をやった。
「こないだ、そうじゃないかなーと思ったんだ。忘れ形見ってやつだね」
「ええ」
ミントはちょっと考えていたが、
「あのう、リリスさん。私、おまじないが趣味なんですよ。元気な赤ちゃんが生まれま

すように――ヒール！」
　と、法術をかけた。
「まあ。どうもありがとう、お嬢さん。なんだか本当に元気が出てきたみたいよ」
　リリスは「あなたもそう思うでしょ？」と、微笑みながらお腹のふくらみに向かって話しかけた。
「やるじゃん」
　ミントにウィンクしたアーチェは、ふと視線を感じて顔を上げる。目をまん丸に見開いたクレスが、階段の途中に突っ立っていた。
「あいつは昔からひとりである研究を続けていた。その集大成を本にまとめたと聞いていたんだ」
　エドワードの書斎で、ルーングロムは一冊の本を探し出し、クラースに手渡した。長い間窓を閉めきってあったせいだろう、かすかに黴の匂いがする。
「ふむ……これがそうか」
「ああ。鍵と一緒に入っていた手紙に、これをおぬしに読んで貰ってくれとあったんだよ。それもあとで見せよう」

クラースはさっそく本のページを繰り始めた。
いっぽう、クレスは手持ち無沙汰にそのへんを眺めていたが、机の上に紙とペンを見つけると、熱心になにやら書きつけ始めた。
「こんなところでミントにラブレターでも書いてんの？」
面白がってクレスの手元を覗き込んだアーチェは、「ひええっ」とのけぞった。
「す、数字がいっぱい！　クレスがこわれたぁ」
「失礼な」
クレスは苦笑しながら、ひらひらと紙をアーチェの前で振ってみせた。
「いいかい？　ここはいまアセリア暦四二〇二年だろ。僕とミントがいた四三〇四年に、トリニクス・D・モリスンさんは三十代半ばくらいだったわけだから……」
「ああ、そういうことですか」
勘のいいミントが頷く。
「どういうことよ。またまたあたしだけわかんないぃぃぃっ！」
アーチェはくちびるを尖らせた。
「モリスンさんは四二七〇年前後の生まれだよね。だとすると、リリスさんのお腹の赤ちゃんが仮に男の子だった場合……」

「きっと、モリスンさんのおじい様ということになるんでしょうね」
「がーん。まだ生まれてもいないのに、もう孫が⁉　信じらんないっ」
アーチェは真紅の瞳をくるくる回してみせた。
そのとき、エドワードの本に目を落としていたクラースが、唸り声をあげた。
「どうしました、クラースさん」
クレスが訊ねると、彼は眉を寄せたまま仲間を見つめた。たった今までふざけていたアーチェとミントも、さっと表情をひきしめる。
「驚きだ……簡単に言うぞ。かつて、信じられない技術で時空転移を実現していたトールという王国があったらしい。その超古代に栄えた王国は、海底に沈んでいるというんだ」
「超古代都市、トール？」
ミントがオウム返しにつぶやく。
「でも沈んじゃったんじゃ、しょーがないじゃん」
「ちゃんと聞けよ、アーチェ。信じられない技術だと言ったろ？　エドワードの文面から察するに、まだその都市は滅んでいないらしい。だが海底まで行く手段がないと書いてある」

なるほど、とルーングロムは懐にしまってあった手紙を取り出した。
「確かにそんな技術も魔法もないものな。しかしそれについては『クラースならできるだろう』と、ここにある」
「なんですって!?」
クラースは手紙をひったくるように受け取ると、むさぼり読んだ。
「本当だ……」

「どうするね？」
リリスに別れを告げ、エドワードの館をあとにした一行は、降ってわいた超古代都市の話に少なからず混乱していた。
ルーングロムの問いに、クラースは困惑顔のまま、
「位置的にはベネツィア北東の沖合い約百キロ、というところでしょうか。そこから調べてみるしかありませんね」
と告げた。
(うまく辿りつければ、僕たちにも時空転移のチャンスがあるかもしれないぞ)
この時代に来たときはなにがなんだかさっぱりわからず余裕などなかったが、実現す

れば元の時代に戻れるわけだし、なにより時空転移をもう一度味わってみたい。クレスは密かに胸をときめかせた。
「うむ。できれば私も同行したいが、そうもいかんしな。いい報告を待っているよ」
そう言って、ルーングロムは城へ戻って行った。
やがてクラースは深い吐息をついた。
「それじゃあ、ベネツィアへ向かうか」
「あ、それはダメです」
珍しくミントが待ったをかける。
「その都市、トールに行ったらもう戻ってこれないかもしれませんよね。だったら先にユグドラシルをなんとかしないと。私たちの時代では、ユグドラシルは朽ち果てているんです。つまり……」
「マナはすでに全て失われていて、魔法はこれっぽっちも使えないというわけだったな」
クラースが引き取って頷いた。
「魔法がなきゃダオスは傷つかないよ。勝てないじゃん、あたしたち」
「その通りだ。順序を入れ替える必要があるな」
クレスは三人の話をじっと聞いていたが、ついに降参した。

「あのー、順序って？　なんかよくわかんなくなっちゃった」
「簡単ですけど？」
ミントが肩をすくめた。
「つまりまず、ダオスが私たちの時代にふたたび現れることも考えて、魔法が使えるようにユグドラシルが朽ち果てないですむ方法を探すんです。その次にベネツィアから沖に出てトールのことを調べます」
はあ、とクレスはため息をついた。
「いつもながら尊敬しちゃうよ、ミント」
「はん。どっちにしても、まずはどっかの宿でごはんでーすっ♪」
アーチェが高らかに宣言すると、絶妙のタイミングでクレスのお腹が鳴った。

第六章

『おかあさん』
ミントは、赤あかと燃える暖炉の前でクロスに刺繡をしている母親にしなだれかかった。
『なあに』
『おかあさんがお耳につけてるの、きれい……』
鳶色の瞳をキラキラさせて、ため息をつく。
『ほしいなあ』
『ああ、これ？　ごめんね、ミント。このイヤリングだけはダメなのよ。おかあさんのおかあさんからもらった大事な大事な法術師の証なの』
『ふうん……お馬さんのかたちだね。ミント、お馬さんってスキ』
母は微笑み、

『ユニコーンっていうのよ。ユニコーンは法術師の象徴なの。この世界のどこかでミントのことも見守っていてくれているのよ』

と言った。

『……』

母はクロスをテーブルに置くと、いつもかぶっている帽子をとり、ひとり娘の手に持たせた。

『かわりにこの帽子をあげましょう』

『ほんとっ!? うれしいな。でもミントにはまだおおきいよ』

『ふふふ。とっても可愛いわよ』

『ありがとう、おかあさん』

(お母さん……)

ミントは、自分は夢を見ているのだと思いながら、身じろぎをした。そしてハッと飛び起きた──。

昨夜はアルヴァニスタに近い宿に泊まったのだった。窓の外に見える空には、まだふたつの月がかかっていた。クレスたちは健康的な寝息をたてて眠っている。

(今の夢はいったい……)

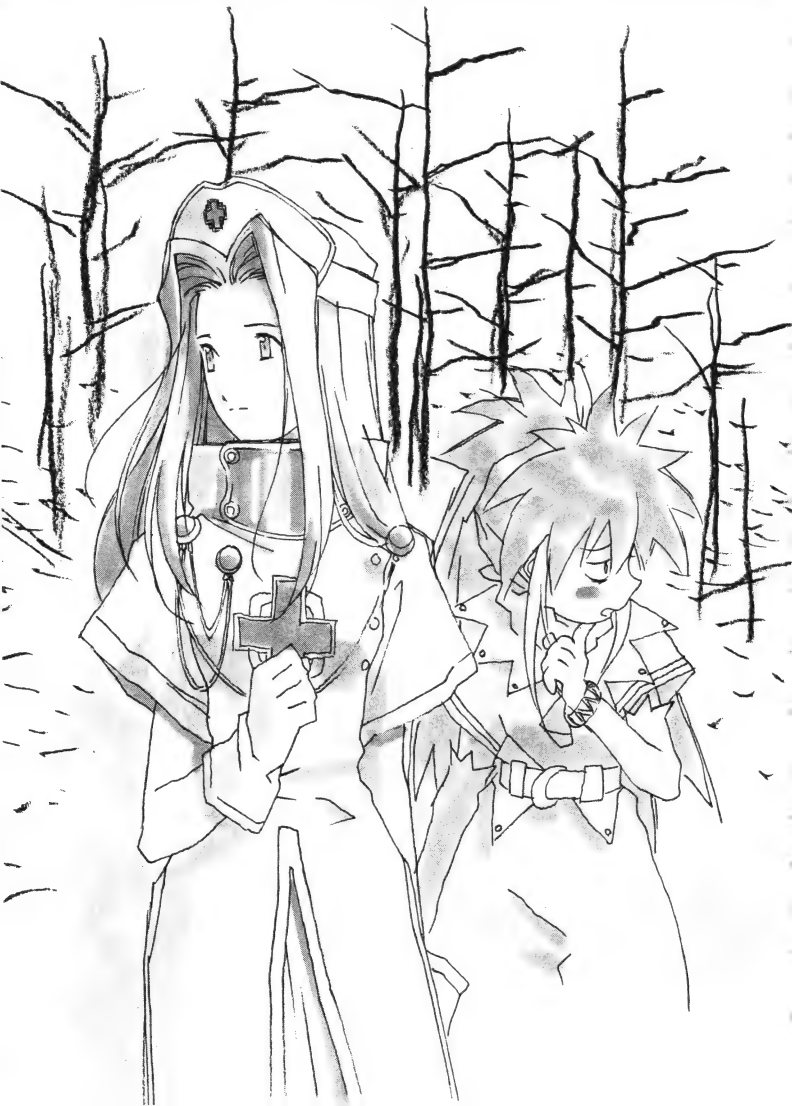
ミントはベッドサイドのテーブルに置いてある帽子に目をやった。
それから、いつも肌身は離さずつけているお守り袋から、以前クレスが落とした、母メリルのイヤリングを取り出す。ユニコーンの形をしたそれは、ミントの手の上で、誘うように輝きを増した。
「わかったわ、お母さん。私、やってみます」
ミントはイヤリングを見つめて、頷いた。

「みなさん、聞いてください」
宿の食堂で朝食のテーブルについているとき、ミントが居住まいを正した。
「どうしたんだい」
オムレツと格闘していたクレスが、手を止める。
「私、昨夜はユグドラシルを復活させる方法を考えながら眠ってしまったんですけど……やっぱりいまの私の法術ではどうにもならないですし……」
「で？」
クラースが促す。アーチェは、給仕の老婆にふた皿目のサラダを貰っているところだった。

ミントはまっすぐな眼差しで、
「ユニコーンの力を借りるのです」
と、答えた。
「ユニコーン？」
フォークをくわえたアーチェが、サラダを見たまま首を傾げる。
「ええ。ユニコーンは法術師の証で、昔からこの世界のどこかにいると言われています。うまく会えたとしても力になってくれるかどうかはわかりません。でも、いまはユニコーンを頼るしかないと思うんです」
「あっ、さっきのよりラディッシュが少ないじゃん！　好きなのにっ」
アーチェが叫んだ。
「うーん。しかしどこにいるかわからないんだろう？」
クラースが顎を撫でながら、うなった。
「いいじゃないか。探しに行きましょうよ、クラースさん。きっと見つかりますよ」
クレスが力強く言うと、ミントはやっと笑みを浮かべた。
「ありがとうクレスさん」
「でもどこから探すのよ。あ、お婆ちゃん、ありがと」

山盛りのラディッシュを持ってきた老婆は、テーブルに皿を置くとミントに話しかけた。
「お嬢さんの話していなさったのは、あの伝説の白い馬のことかね」
「えっ、ご存知なんですか？」
ミントは驚いて椅子から立ち上がった。
「いやいや、馬違いかもしれないけど……私が子供のころ、祖母から聞かされたんじゃよ。たしか……ミッドガルズの北の森に、角の生えた真っ白な馬が棲んでおるとね」
「それだっ！」
クレスがパシッとテーブルを叩く。だが老婆は皺だらけの顔をさらにくしゃくしゃにして笑いながら、首を振った。
「残念ながらあんたはダメだ。その馬は清らかな乙女にしか会わないそうだからの、ほっほっほっ」
クレスは、「なんだ、やな馬だな」とつぶやいた。
老婆が笑いながら空いた皿を下げて行ってしまうと、クラースはナプキンで口を拭った。
「なんとか道が開けてきたじゃないか。幸運なことに、ここにはその清らかな乙女がふ

たりもいらっしゃるわけだし。なっ」
同意を求められ、ラディッシュを頰張っていたアーチェは、「んふ〜」と中途半端に笑ってみせた。

アルヴァニスタの宿で聞いた森は、ヴァルハラ平原のさらに北にあった。地図には〃白樺の森〃と記されている。
「大丈夫みたいだ」
偵察のために森に入っていたクレスが、足早にミントたちのもとへ戻ってきた。
「雪が積もってるところもあって、ちょっと歩きにくかったけど、別に危険はなさそうだったよ。僕とクラースさんはここで待ってるから、アーチェとふたりで、行っておいでよ」
「え、あたしも？」
アーチェはひとしきりひとさし指の先で鼻の頭を突ついていたが、
「……わかったよぉ。ミント、行こ」
と、ミントの手を取ってすたすた歩き出した。
「——なんか抵抗してましたね」

「ああ」
クレスとクラースは肩をすくめて頷きあった。
「ねえミント、ここでユニコーンに会えなかったら一大事だよね、やっぱ」
「ええ、ユグドラシルを救うすべがなくなってしまいますね」
「ううう」
森の中ほどまできたときだった。アーチェは突然ミントの手をぱっとはなした。
「あっ」
「あ、あたしはあっち行ってみるから。ミントはそっちね。バイバイ」
「え、ちょ、ちょっとアーチェさん⁉ 待って……ああ、行っちゃった」
ミントはアーチェが走り去って行った木立ちの奥をしばらく覗き込んでいたが、ため息をつくと、ひとり歩き出した。
雪をかぶった大地に、ほっそりした白樺の幹が美しい。やがてミントは林の奥に澄みきった池を発見した。
(まあ、きれいな水……)
吸い寄せられるように岸に近づいたミントは、ハッと足をとめる。水面の上に張って

いる木の枝の陰から、ゆっくりと白いものが姿を現したからだった。
（いた……！）
額に角のある真っ白な馬……ユニコーンに間違いなかった。水浴びをしていたらしい。
「あのう」
おずおずと声をかけると、ユニコーンはミントのほうへ顔を向けた。
「あなたが来ることはわかっていました。私になにかご用ですか、かわいいお嬢さん」
どこか遠くから響いてくるような、不思議な透明感のある声だった。
「は、話せるんですね、よかった。私の話を聞いてほしいのです。この世界の人々や、動物たちの命にかかわる大切なことなんです――」
ミントは白馬が四肢を水につけたまま、じっと耳を傾けてくれていることにほっとしながら、話し始めた。

そのころ、森の入り口では、クラースが珍しく軽口をたたいていた。
「今回ほどクレス、おまえのふがいなさに救われたことはなかったな」
「どういう意味です？」
「だってミントはまだユニコーンに会う資格があるわけだから……ということは……」

「ははは」
クレスは白樺の幹に拳を当てながら、
「クラースさんに意地悪されたって、ミラルドさんに言いつけちゃいますよ」
と、横目で睨んだ。
「関係ないだろ、ミラルドなんて……!!」
クラースはハッと身構える。
「どうしました」
「邪悪な気配が、森の中に！　行くぞクレスっ」
クラースは、ダッと駆け出した。

「……どうして黙っているんですか」
池のほとりでは、ミントが困惑していた。話を聞き終わったユニコーンが、さっきから沈黙したままなのだ。
「私の話を疑っているんですね。でも本当に……」
ユニコーンが、つっと顔をあげた。
「危ないっ！」

グワァァァッ！

「きゃあっ!!」

突然、白樺の陰から飛び出し、襲いかかってきたなにかに、ミントは叫んだ。夢中で杖を振り回すうち、ようやくそれが三体のモンスターだということを把握する。

（これは……ダオスの手下！）

「ユニコーンさん、逃げてください、早くっ！」

ミントはモンスターを必死で食い止めながら、白馬を逃がそうと叫び続けた。

走るクレスは、ミントの悲鳴を耳にしてギョッとなった。

「クラースさん、今の……」

「ああ、あっちの方角だ。急ごう！」

ふたりが森の中の小道を曲がったとき、

「あ、アーチェ!?」

クレスはあわてて足を止めた。

アーチェは白樺の幹にもたれ、ポーッと空を見上げている。

「なにしてるんだ、こんなところで。ミントはっ!?」

「へ？」
彼女は初めてクレスたちに気づき、
「あ、あのあの、あのね」
とうろたえた。
「とにかく一緒に来るんだ。ミントになにかあったらしい」
「うそっ」
クラースの言葉に、アーチェは顔色を変えた。
ようやく池のほとりに辿り着いた三人が目にしたものは、傷つき倒れた白馬と、必死にモンスターを追い払おうとしているミントの姿だった。
「ミント！」
「クレスさんっ！」
ミントは仲間の姿を見て気が抜けたのか、へたへたとユニコーンの傍らに座り込んでしまう。
「あとは僕たちにまかせて！　行くぞっ、獅子戦吼っ！」
クレスは、しつこくミントにつきまとおうと円を描くように飛んでいるモンスターたちを、まとめて攻撃する。

グアー！
クラースが印を結び、マクスウェルを召喚した。
光の球体はふたたびクレスの剣を受けてふらついているモンスターたちの体に突っ込み、その皮膚を破って弾ける。
「インデグニションっ！」
すかさずアーチェが、とどめの雷を落とした。
ドオォォォ――――――ンッ!!
あとは嘘のように静かになった。
「ミント、大丈夫か」
「私は平気。でも……」
ミントはクレスに答えながら、目を閉じているユニコーンの背中に震える手を伸ばそうとした。
「お嬢さん……」
そのとき、ユニコーンがミントを呼んだ。うっすらとあけた目は、黒く濡れ光っている。
「さっきの話、信じます。お嬢さんの心に一点の曇りもないことはわかっていたのに、

迷ったりして……」
「いいんです。誰だってにわかには受け入れられないですよね、こんなこと」
ミントとユニコーンはしっかりと見つめあっていた。
「とにかく傷を治さなくては」
ミントが気遣うと、
「いいえ、それには及びません。私は姿を変えてお嬢さんたちの力になりましょう。ユニコーンホーンで、どうかこの世界を救ってください……頼みましたよ」
白馬は横になったまま首だけ起こし、天を仰いでひと声いなないた。するとユニコーンの体がまばゆく発光をはじめる。
なんて美しいんだろう、とクレスは固唾をのんでその光景を見つめた。
やがてスーッと光が引いたとき、池のほとりには一本の白い角が残されていた。ユニコーンの額に生えていた角そのものの形ではなく、緩やかなねじりが入り、先端に埋め込まれた宝石は虹色の輝きを放っている。
「これがユニコーンホーン……これがあればユグドラシルを復活させられるんだな」
クレスの言葉に、ユニコーンホーンを胸に抱いたミントはこっくりと頷いた。
「はい。聖なる力を感じます……法術の聖なる力を」

「よかったねっ」
アーチェがにこっとする。
一行は、さっそく精霊の森めざして出発することにした。
ふと思い出してクレスが訊ねると、アーチェはまたあわてだした。
「ところでアーチェ、さっきはなんであんなところにいたんだい？」
「あっ、あのっ。あたしじゃユニコーンに会えないだろうなあ、なんて思ってさ」
「なんで？」
「む、昔彼氏がいて……そ、そのつまり……」
「はあぁ？」
アーチェは真っ赤になって、とうとうクレスを怒鳴りつけた。
「う、うるさいなっ。しつこいよっ。しょーがないじゃん。あたし、かわいいしっ！」
「ははん、なに言ってんだ」
笑うクレスをさらにクラースが笑い飛ばした。
「まったくおまえというやつは……ふがいないだけじゃなくて、鈍感ときている。どうしようもないな」
「え、なんでですか？　なあ、ミントわかる？」

クレスはしきりに首をひねったが、ユニコーンホーンをしっかりと抱きしめ、隣りを歩いているミントの耳にはこの騒ぎがちっとも聞こえていない様子だった。
彼女の横顔には、法術師としての深い喜びと覚悟が満ちていた——。

精霊の森は不気味に静まり返っていた。
鳥や獣がいなくなったわけではないだろうが、鳴き声はもちろん、コソリとも音がしない。まるで、どんな微かな空気の動きさえもユグドラシルにとっては命とりになると、森全体が悟っているかのようだった。
「とうとうこんな姿に……」
哀れに枯れ果ててしまったユグドラシルをひと目見るなり、ミントはくちびるをきつくかみしめた。
「みなさん、さがっていてください。私がいま使える最高の法術をかけてみます」
そう言い置いて、ミントはユニコーンホーンの先を大樹の幹に向ける。長い睫毛を伏せ、あとはじっと祈っているように見えた。
(ミント、頑張れよ!)
しばらくは何事も起こらなかった。

（どうした、ダメなのか⁉）
クレスが焦り始めた、そのとき。ユニコーンホーンの先端から、突然ものすごい力が迸り出た。
「うわっ、重い！」
アーチェは思わず叫んだが、それは的確な表現といえた。
あたり一帯を包み込んでいる法術のパワーは、ユグドラシルを中心として凝縮しようと内に動いていたのだ。
「な、なんだ、どうなってるんだ⁉」
クラースが身を低くしながら、驚愕の表情でミントの背中に問いかける。ミントは前を向いたままで、
「ユ、ユニコーンホーンの力が……強すぎてっ」
と、苦しそうに答えた。
「ミント、危険だよ。早くユニコーンホーンを放すんだ‼」
「そんなことダメです、クレスさんっ。途中でやめたらこの力は暴走してしまうかもしれません。そうなったらユグドラシルは……」
目に見えない力に翻弄されながら、クレスはミントの名を何度も叫んだ。

（クレスさん……やめるわけにはいかないんです）
ミントは、ともすれば巨大な力に吸い込まれそうになる自分と必死に戦いながら、ぎゅっと目を閉じた。
（お父さん、お母さん！　力を……私に、強い強い力をください……！！）
熱い、とミントは感じた。イヤリングが入ったお守り袋に触れている肌が、燃えるようだ。
と、ユグドラシルの幹の周りから、なにかが激しく噴き上げた。
限界まで凝縮された力が、一気に爆発したのだった。
それは輝きながら大地と天とを結ぶ一本の光の柱となり、クレスたちの目を射た。
「うわあああああぁぁぁ――っっ！！！」
そのあとになにが起きたのか、誰も見届けることはできなかった――。
楽しげな小鳥のさえずりに、クレスはハッと目を開けた。
（いけない……気を失ってしまったんだな）
抜けるような青空を、見事に繁った樹の枝が切り取っているのが見える。
「え!?」

あわてて立ち上がると、目の前には青々とした大樹がそびえていた。
優しい風に葉擦(はず)れの音が重なり、みずみずしい樹の香りは呼吸のたびに彼の胸を満たした。
「やった!!　ユグドラシルが元に戻ったぞ!!　ミント、クラースさん、アーチェ、みんな起きてよ!!」
クレスは近くに倒れている仲間をひとりずつ揺すってまわった。
「おお、これは……」
クラースはユグドラシルを仰ぎ見たまま、動けなくなった。ミントとアーチェはしっかりと抱き合う。
「こんなに美しい樹だったんですね」
ミントの言葉に、クレスは頷いた。
(僕は、前にもこの姿を……。僕の時代に森で見た幻こそ、このユグドラシルだったんだ)
「やったな、ミント。よく頑張った」
クラースが微笑む。
「あれ？　かわいいのが来たよ」

アーチェは森の奥からちょこちょこと駆け出してきた猪を見つけ、くすっと笑った。体に白い縞がある。まだ子供だった。

「うーりうりうりうり。あんたも樹が元気になったのを見にきたんだね。うーりうりうり」

「なんだ、うりうりって」

クレスが訊ねると、アーチェはばかにしたように彼を見、

「うり坊呼んでるんじゃん。わかんないの？」

と言った。

「うーりうりうりうり」

猪の仔はアーチェを警戒する様子もなく、キュルキュル鳴きながらしゃがんでいる彼女の腕に抱かれた。

「うりうり、ね」

クレスは猪の仔に頬ずりしているアーチェを眺めるうち、複雑な気持ちになった。

(僕たちはよく猪狩りをした……僕とチェスター、ふたりで……朽ち果てたユグドラシルのある南の森で)

この光景をチェスターに見せてやることができたら、とクレスは思った。甦った大樹

がみごとな分、クレスの胸は痛んだ。
「あっ、マーテルだ」
アーチェが高い枝を指さす。ユグドラシルの精霊マーテルは、すーっとミントのほうへ降りてきた。
「力が湧きあがってくるようです。これはあなたの力なのですね」
「いえ、私だけの力じゃ……ユニコーンが助けてくれたんです」
ミントはそう答えながら、ユニコーンホーンが消えていることに気づいた。力を使い果たして消滅してしまったのだろう。
「そうでしたか。ありがとうございます。これで私もいましばらく生き長らえることができそうです……でも」
「でも？」
クラースが聞き返した。
「マナの力は未だ大量に消費されているのです。わかりません……なぜこんなに……」
「それはたぶん魔科学のせいだろう。あれだけの力を引き出すには相当なマナを消費するに違いない」
クラースは、ライゼンが操っていた魔科学兵器の威力を思い出して言った。

マーテルは、その言葉をじっと聞いていたが、なにも言わずにフッと姿を消してしまった。
「あ、消えちゃった」
アーチェの腕から猪の仔が飛び降りて、森の奥へ戻ってゆく。
「ねえ、もしかして」
それまでなにかをじっと考え込んでいたクレスが、慎重に口を開いた。
「ダオスがミッドガルドを襲ったのは、魔科学を滅ぼそうとしたためなんじゃあ……」
ミントがハッとする。
「じゃあ、ダオスはマナを利用しようとしているんでしょうか」
「うーん、魔科学の力を恐れたって見方もできるよ。だってダオスって魔法でしか傷つかないわけじゃん？」
猪に「バイバイ」と手を振っていたアーチェが意見をのべた。
「まあ、ここで議論したってはじまらないな。もう一度直接会って確かめるまでだ」
クラースが帽子の鍔(つば)を直しながら、言ったとき、
「いよいよトールか……」
クレスはそうつぶやくと、

「悪いけど、みんな先に行っててくれないかな。すぐに追いつくから」
と、思い切ったように走り出した。
「えっ、どこ行くのっ!?」
「クレスさんっ」
アーチェとミントが驚いて叫んだが、クレスの後ろ姿は木洩れ陽の揺れる森の道に小さくなって、消えた。

ベネツィア港で雇った帆船は、沖合い百キロの地点を目指して走った。幸い、追い風が味方してくれた。
船長によると、そのあたりの海は相当深度があるのではないかということだった。親切な船員が船室に降りることをすすめてくれたが、クレスたちは甲板で過ごすことにした。
クラースは出航のときからひとり舳先(へさき)に陣取り、仲間の話に加わることもなくじっと海を見つめている。
「なにを考えてるんだろうな、クラースさんは」
クレスが気にすると、アーチェは意味ありげに笑った。

「あれはね、意地を張らずに家に寄ってくればよかったなーと思ってるんだよ」
「そうかもしれませんね。ユークリッド村はもともと通り道だったんですもの。ミラルドさんだってクラースさんのお顔を見たら喜んだでしょうに」
ミントも頷く。
「通り道っていったらアーチェ、自分だってそうだったじゃないか」
「あたしはいいの」
アーチェは手すりから身を乗り出して、砕ける波を眺めたまま、
「ちょっとの間くらい会えなくてもいいんだよ。お父さんはお父さんなりにあたしのこと考えてくれてるの、感じるしね。何年も離ればなれになってるお母さんのことだって、あんなに愛してるじゃん？」
と、微笑んだ。
「それよかさあ、クレスももういいかげん話してくれたっていいでしょ。精霊の森にあたしたちを残して、どこ行ってたのよ」
「そ、それは……」
クレスが口ごもったとき、クラースがこちらにやって来た。
「あっ、ク、クラースさん。考え事はもういいんですか」

「ああ」
「チェリーパイ？」
アーチェが上目遣いに訊ねると、クラースは一瞬とまどい、それからいきなり怒り出した。
「なっ、なに誤解してるんだ。俺はエドワードの手紙にあったことをだな……誰があいつのことなんか」
「へ？　誰もミラルドさんのことなんか言ってないよ。パイって言っただーけ」
「……！　アーチェ、おまえぇっ」
「いや～ん、クラースおじさんこわーい」
アーチェはきゃあきゃあいいながら甲板を駆け回る。そこへ、船長がやって来た。
「おい、ここいらでちょうど百キロだが、どうするね」
「よし。船を停めてくれ」
クラースは頬のあたりを緊張させながら、指示を出す。
「みんな、一緒に来てくれ。アーチェもいつまでもふざけてると置いていくぞっ」
「わかったわよぅ」
「クラースさん、一体どうやって海底に行くんです？」

クレスの問いに、クラースはそっけなく答えた。
「答えはエドワードが教えてくれたよ」
錨が降ろされた。
舳先まで戻ったクラースは、印を結んで、
「ウンディーネ！」
と、水の精霊を召喚する。
と、見覚えのある精霊が銀色の髪をはためかせながら空中に出現した。
「我があるじよ。用件はなにか」
「水の精霊よ。我らを海底深く沈む都市に導きたまえ」
ウンディーネはすぐに「承知した」と頷き、片手をあげる。
「この泡の中に入るがよい」
泡だって？ と、クレスは驚いた。
甲板の上には彼らがちょうど入れそうな大きさの、透明な球がふわふわ浮いてる。
「世話になったな。それじゃ行くぞ」
クラースは船長に礼をいうと仲間を促し、まるでいつもやっているような自然な様子で泡の中に入った。

泡の表面はクレスたちを受け入れるたびに柔らかく形を変えたが、破れることはなく、すぐに球形に戻るのだった。
(クラースにならできるってエドワードさんが書いていたのは、こういうことだったのか)
クレスは泡越しに、驚愕の表情を浮かべている船員たちに手を振ってみせる。泡はふわりと水面に降り、そのまま海に潜っていった。

「うわあぁぁぁ～速いなあ。酔いそう」
太陽光が届かなくなるまで、あっという間だった。泡におでこをくっつけて暗い海を覗いていたアーチェが、ふるふるとポニーテールを振る。
やがて、足元が明るんできた。
「え、なんで下が明るいんだ？」
クレスが驚いて背中を丸め、下を覗く。と、微かな衝撃があった。
「トールに着いたようだ」
クラースは先頭に立って外に出た。全員が出てしまうと、ウンディーネの泡ははじけて消えた。

「見て！　上に海があるよ」
アーチェが頭上を指さす。
「うーん。方法はわからんが、都市全体が水の圧力に耐え得るほど頑丈な、見えない壁に囲まれているんだろうな」
と、クラースも暗い空のような海を振り仰いだ。
クレスは用心深くあたりを見回した。
それは不思議な光景だった。明らかに高度な技術を持って造られたに違いない建造物が、整然と並んでいる。
トールの要所要所を映し出しているのだろう、空中に浮かんだ巨大なホログラムは、一定の間隔でその形を変え続けていた。
「これを見ると、中心部以外の面積も相当なものですよ」
「都市っていうより、大陸だな」
「それにしてもここは……こんな立派な都市なのに、人の気配がまるでありませんね」
「ああ、みんなどこへ行ってしまったんだろう。時空転移の技術なんて、本当にあるのかなあ」
ミントとクレスが話していると、

「とりあえずトールが沈んでいるっていうのは本当だったんだ。偉大な魔術師の言葉を最後まで信じるしかないだろう？」
と、クラースはホログラムを眺めていたが、
「メインシステムを探すべきだな。よし、あのいちばん大きな建物に入ってみるぞ」
と、断を下した。
シンと静まり返った道路に沿って歩き、建物に入ってみると、同じような扉がいくつも並んでいるのが目に入った。
クレスたちは手分けしてあちこちの部屋を調べてまわったが、これといったものは見つからない。
「くそう、なにもないじゃないか」
クラースが焦り始めたとき、
「ちょっと来てください！」
ミントがみんなを呼ぶ声が聞こえた。
「どうした、ミント」
「ここだけ鍵がかかっているみたいなの」
いち早く駆けつけたクレスに、ミントはドアを示す。他のドアと違い、そこにはなぜ

か取っ手すらついていなかった。
「なるほど、押してもびくともしないや」
クレスが考え込んでいると、クラースとアーチェが到着した。
「ここに穴があいてるが……鍵穴にしては平べったいな」
ドアの合わせ目の近くに細長い横穴を発見したクラースが、首を捻(ひね)る。
「ぺっ。まじぃ」
「こんな大変なときになにを食べてるんだよ、アーチェは」
クレスはなにかをしきりにかじっている仲間に、眉をひそめた。
「だっておなかすいちゃったんだもん」
と、アーチェはくちびるを尖らせ、
「あっちにバーがあったんだよ。カウンターの上においしそうなおつまみが載ってたから貰ってきたたんだけど」
と言い訳する。
「見せてみろ」
クラースが、アーチェが持っていたものをひったくった。ちょうどトランプくらいの大きさのカードだった。

「あ、食べてもムダだよ。高度文明都市風のしイカかと思ったのに、ぜんぜんイカの味がしな……」
「これはカードキーか!?」
クラースは驚いて、カードをためつすがめつした。表側には複雑な紋様が描かれている。
「試してみましょうよ」
クレスはカードを受け取り、ドアの鍵穴に差し込んでみた。
「開くかなあ」
「さあな。はじっこに誰かさんの歯型がついちゃってるから、どうかな」
「たはは」
そのとき、ピーッという高い音が聞こえた。
『カード認識、カード認識。セキュリティシステムを解除します。マザーコンピュータールームへようこそ』
ドアが、左右に開いた。
「だ、誰か喋ったよ。『マザーコンピュータールーム』だってさ」
「行ってみよう」

ビーッ、ビーッ！
だが、クレスたちが中へ入ったとたん、今度は警報が響き渡った。
『不法侵入者発見！　タダチニ排除！　タダチニ排除！』
「うわ、なんか出てきたぞっ」
コンピュータールームの奥から、ぞろぞろと現れたのは灰褐色の簡易ロボットたちだった。
直方体や球体の胴に手足をつけただけで、顔はない。
見かけは不気味だが、侵入者をドアの外に追い出す役目しか担っていないらしく、まとわりついてはきても攻撃する気はないようだ。
「仕方ない。適当に振りきろう」
クレスは剣を振り回し、ロボットを威嚇して道を作った。その隙に仲間たちは奥のコンピューターまでたどりつくことができた。
「これはまた、かなり特殊な装置のようだな」
クラースがため息をつきながら、目の前の巨大な機械を見つめた。
彼らと装置の間は空中に浮かぶ通路で結ばれているが、そこから遥か下を見下ろすことができる。

装置はいちばん下までつながっており、まるで都市に根を張る巨大な樹木のようにも見えた。
「お待たせ。あいつらみんな、あきらめて戻って行ったよ。それで……うわあ」
息を弾ませたクレスがやって来て、装置に目を丸くする。が、すぐに、
「ああ、それで、あいつらとやりあってるときにこれを拾ったんですけど……」
と、話を戻し、クラースの手に宝石のついた指輪を乗せた。無色透明の石は、強い輝きを放っている。
「これは……ダイヤモンドじゃないか！」
「ええ、もしかしたら役に立つかもしれないと思って」
「わかった。大切に持っていよう」
クラースはいつもの革袋にダイヤモンドの指輪をしまった。
一行が通路を渡りコンピューターのすぐ前まで行くと、中央部分が明るくなり、システムが起動したのがわかった。
「ひ、ひとの顔が浮かんでる！」
アーチェが叫ぶ。
『私はオズ。トールシティの全機能をサポートしている。使用目的を述べよ』

った。
ホログラムが喋るのをクレスたちはぼう然と眺めていたが、ミントがおそるおそる言

「時空転移を、お願いしたいのですが」
『音声認識。エネルギーチェック開始――』
「つ、通じたわ」
「やっぱりこれが時空転移装置だったんだ！」
だが、そのときオズの顔の光量がフッと落ちた。
『エネルギーが不足。都市機能回復の必要あり。回復させるか』
「どういうこと？」
「よくわからんが、機能回復しなければ時空転移は不可能ということらしい。オズ、回復を頼む」
クラースの言葉をオズが音声認識したとたん、あたりがグラグラ揺れだした。
「きゃあっ、なにこれっ!?」
『トール市民に警告、都市機能回復システム作動！　トール市民に警告！』
「ちょ、ちょっと、警告っていったい……なにかとんでもないことしようとしてるんじゃないか!?」

クレスたちはお互いの体を支え合って耐えていたが、やがて揺れがおさまったとき、上方から射してくる陽の光に気づいて驚いた。
「浮上、したのか？　なんという科学力だ！　大陸ごと持ち上げてしまうなんて……」
クラースの声は震えを帯びていた。
ベネツィア近くを航海中の船があったなら、巨大な大陸が海から出現するのを見ることができたに違いない。
だが、ゆっくり感心しているひまはなかった。オズが訊ねてきた。
『エネルギー確認。相対年数を述べよ』
クレスがあわてて答える。
「ええと、いまから百二年後の、五月二×日。ユークリッド大陸の南端、地下墓地のいちばん奥！　で、いいんだよね？」
「ええ、ほぼ確実にダオスがいるはずです」
ミントが頷く。
『乗員は所定の位置へ』
クレスたちがスポットで照らされた位置に立つと、シールドカプセルが降りてきた。
『転移空間隔離。界面を現在の時間から切断――切断完了。反物質エネルギー解放――

！』

「行くぞっ、みんな！」

クレスは、しっかりと目を見開いていよう、と自分に言い聞かせた。

（この時代に来たときは気を失っちゃったけど、こんどは大丈夫だ。僕は僕の時代に帰るんだからな）

青い光がまばゆくスパークし、カプセルを包み込んだ。

「おいっ、しっかりしろっ」

モリスンがチェスターを抱き起こそうとしたとき、ダオスの怒りは頂点に達したようだった。

「やつらをどこへやった」

「答えるものか」

モリスンはぐっと歯を食いしばった。

「ふふ……知っているぞ。あの光は時空転移の光。どうした、自分自身は送りそこねたか……未熟者め。ここで朽ち果てるがいい！」

チェスターを抱いたモリスンの目が大きく、見開かれる。
ジジジ……バチッ！
地下墓地に、たった今クレスとミントを過去に送ったはずの青い光が出現するのを、モリスンは見た。
（くっ、戻ってきてしまったのか⁉　いや、そうではないぞ‼）
スーッと光が消えた。
「き、貴様たちはっ⁉」
今度はダオスが驚愕する番だった。
クレス、ミント、そしてアーチェとクラースの姿を目にして、ダオスはじりっと一歩後ずさった。
「おお！」
モリスンは、世界の存続をかけて過去に送ったクレスたちが、新たな友とともに戻ってきたことを理解すると、感激の声をあげた。
チェスターもうっすらと目をあけ、親友の姿を捉える。

「ク、クレス……」
（よかった……間に合ったんだな！）
クレスはちらりとチェスターに視線を走らせたが、すぐにダオスに向き直った。
「仲間も世界も、おまえの好きにはさせない！」
望むところよ、とダオスがくちびるを歪ませる。
「私には果たさなければならない使命がある。こんなところで倒されるわけにはいかないのだ！」
チェスターが跳ね起きた。
「オレも戦うぞ、クレス——!!」
チェスターは自分の手元を見て、ハッとなった。
「ゆ、弓が……弓が、ないっ！」
「チェスターさん、それは」
ミントが言いかけたが、クレスはそれを遮り、
「チェスター、モリスンさんと一緒に下がっているんだ。ここは僕たちが！」
と、剣を抜く。
「やあっ！　虎牙破斬っ!!」

「くっ」
　ダオスはクレスをかわし、傍らで自分を睨みつけていた真紅の瞳に向かって挑みかかる。
「アーチェ！」
「わかってるってっ。インデグニション！」
　轟音と共にダオスめがけて雷が落ちた。
「紅蓮剣！」
「うおおぉぉぉぉうっ！」
　ダオスは吹っ飛び、岩壁に当たって転がった。すかさずクラースが印を結ぶ。
「出でよ、ノーム！」
　土中から出現したノームによって、ダオスはさらにダメージを受けた。
「さあ、立て！　ちゃんと決着をつけようぜ！」
　叫ぶクレスを見ていたチェスターは、衝撃を受けていた。
（なんて強くなったんだ、クレス……）
　ダオスはいったんは立ち上がろうとしたものの、そのまま力尽きて動かなくなった。
「やったぁ！」

アーチェが快哉を叫んだ、そのとき。

ゴゴゴゴゴゴ――――！

突然、墓地全体が揺れ始め、岩壁が落ちた。

「危ない！　ダオスが復活したときの膨大なエネルギーが暴走して、地殻に影響を与えたんだ。溶岩が来るぞ！　早く逃げるんだ!!」

モリスンの声は、崩れ落ちた岩が砕け散る音にかき消された。クレスは仲間を出口に向かって誘導し、なんとか外へ飛び出すことができた。

ドオオォォォ――――――ンっ!!

直後、大爆発が起き、地下墓地の出口からもすさまじい炎と真っ赤な溶岩が噴き出した。

「危ないところだったな」

安全な場所まで避難したあと、クラースがいまさらのように吐息をついた。

「さすがのダオスも溶岩でとけちゃったね。どーろどろに」

アーチェが笑う。

「そうだ、紹介がまだだったよね」

クレスが言いかけると、モリスンが笑った。

「クレス、忘れたのか？　私の家は遠くないぞ。話は戻って落ち着いてからにしようじゃないか」
「それもそうですね。あっ、思い出した。トリスタン師匠が訪ねて来たんです」
「ええ、そうでした。いま、お宅でお茶を飲んでるはずですよ」
クレスとミントは顔を見合わせて、ぷっと吹きだした。長い間切断されていた時間と記憶が再びつながったことが、なんだか無性におかしかった。気がつくとふたりとも涙を流しながら笑っていた。

ここ一週間ほどは、ずっと晴天が続いているのだという。
モリスンは、そんなどうでもいいような話をしながら、自宅の居間でクレスたちをねぎらっていた。
だが、エドワード・D・モリスンの話がでたとたん、
「ほう、私の先祖にねえ」
と、興味を示した。
「うん。顔がそっくりだったよ。それに、おじさんのたぶんおじいさんにあたるはずの人が、ひいおばあさんのお腹の中にいたよ」

アーチェの説明に、モリスンは一瞬とまどった顔になったが、
「それじゃあ、そのうち家系図でも作ってみるかな」
と、顎をこすった。
陽あたりのいい居間には、ミントがいれてくれたお茶のいい香りが漂っている。窓辺のソファでは、待ちくたびれてしまったらしいトリスタン師匠が丸くなって眠り込んでいた。
(なんて平和なんだろう。エドワードさんが亡くなったことは、あとでゆっくり話そう)
と、クレスは思った。
「しばらくはのんびりしていってくれよ。私も法術師のはしくれとして、きみたちに聞きたいことが山ほどあるしね」
モリスンがクラースとアーチェにお茶のおかわりをすすめた。
「ありがとうございます」
クラースは、だが落ち着かぬ様子だった。
「どうしたんですか？　なにか気になることでも？」
クレスが訊ねると、
「ああ、いや……」

と曖昧な返事をした。
「地下墓地はどうなったんでしょう、モリスンさん」
「どうなったって……クラース君も一緒にいたじゃないか。溶岩が一分の隙もなく詰まって、ダオスは死んだ。間違いないよ」
「そうですよね……」
クラースは、やっとほっとしたように、笑みを浮かべる。
「なんなりとお話しますよ。魔術のこと、精霊のこと。私は召喚師なんです」
アーチェは砂糖を何杯もカップに入れながらクラースの横顔を眺めていたが、チェスターの視線に気づいてキッとなった。
「ちょっとぉ。じろじろ見ないでよ。そんなにあたしが珍しい？」
チェスターは好戦的なアーチェの態度にムッとし、
「ああ、珍しいね」
と言い返した。
「その真っ赤な目も、ピンクの髪も、派手な魔法も、全部珍しいや」
「なによっ。さっきはひとが戦ってるのに、なーんにもしなかったじゃん？」
「そ、それは弓が……」

「男のくせに弱っちいあんたなんかより、あたしのほうがよっぽどましだわよ！」
「!!」
チェスターは、明らかに傷ついた表情になり、絶句した。
「まあまあ、今日はダオスを倒しためでたい日なんだぜ。ケンカはよすんだな」
モリスンが苦笑しながらふたりの間に割って入ったときだった。
「ん？」
ソファで寝ていたトリスタンがぱちっと目をあけた。
「おお、おんしら、帰っとったか！　ならもう留守番はいらんな。帰ろっと」
トリスタンは、思いがけず大勢でいるクレスたちを見てびっくりしたようだったが、すぐに、
「なあトリニクスぅ、帰る前にわしにもお茶」
と、子供のようにねだった。
相変わらずだなこの人は、とクレスは密かにあきれた。やはりどう見ても剣の達人とは思えないのだった。
あっという間に数日が過ぎた。朝食のあとで、クラースが言いにくそうに切り出した。

「そろそろ、戻ろうと思うのですが」
「……そうか」
モリスンは言葉少なに答えた。クレスとミントは思わず体をこわばらせた。
「ゆうべアーチェとも相談して、滞在が長くなればなるほど別れが辛くなるからと……」
「うん」
アーチェは真剣な顔でこっくりと頷く。
「これからすぐふたりで北へ発ちます」
「うん。バイバイだね」
「……！」
ミントが席を立って、部屋から走り出て行く。
「待てよ、ミント」
クレスはミントを追って、前庭へ出た。
「ミント……」
「わかっています、いつかはアーチェたちと別れなきゃいけないって。でも私……」
ミントは声を押し殺して泣いた。
背後から足音が近づく。クラースとアーチェだった。

「ミント、泣くな。私たちは本来できるはずのない出会いをしてしまった……いや、することができたんだ。だったら君たちに会えて本当によかったと、俺は逆に喜びたいと思う……ちょっと屁理屈だけど」
クラースは咳払いした。
「……はい」
蚊の鳴くような声で答えたミントに、アーチェが抱きついた。
「忘れちゃやだよ？　あたしは絶対みんなのこと忘れないからっ！」
モリスンとチェスターも見送りのために玄関から出てきた。
「トールまで送りましょうか」
クレスが申し出たが、クラースは笑って首を振った。
クラースとアーチェが背を向ける。
なにか言い忘れたことがあるような気がして、クレスはふたりの姿をじっと見つめていた。
と、そのときだった。抜けるような青空に黒い点がいくつも現れた。
「え？」
ふと上を見上げたモリスンは、

「な、何だ!?」
と叫んだ。
黒い点はみるみるうちに大きさを増し、無数の隕石となって轟音と共に降り注ぐ。
「危ないっ！　みんな家へ入るんだ。クラース！　アーチェ！　戻れっ！」
隕石が地表に衝突する衝撃はすさまじかった。
駆け戻ってきたクラースとアーチェを待って、クレスたちは家の軒下へ避難したが、そのときにはすでに庭にいくつもの穴があき、屋根も相当な損傷を受けていた。
やがて、ぴたりと落下が止まった。
「ど、どうやらおさまったみたいだな」
クラースがため息をつく。
「これはいったい……」
クレスが軒下から出ようとしたとき、今度は目の前で青い光がスパークした。
ジジジ……ジジ……バチッ！
「これは、時空転移だよっ」
アーチェはほうきの柄を握りしめた。
まさかダオスが？　クレスたちの誰もが言葉には出さずそう思ったとき、光の中から

ひとりの男が出てきた。いかにも実直そうな、中年男だった。
「おお、着いたぞ。ここは確かにトリニクス・D・モリスン殿の家だな」
「私？　モリスンは私だが、なにか用かな」
自分の名を口にされたモリスンが、男に訊ねる。
「これはこれは。私はハリソンと申します。アセリア暦四三五四年、五十年後の未来からアルヴァニスタ国王の命によりやって来ました」
「なんだって!?　未来から？」
ハリソンは頷くと、必死の形相になって訴えた。
「ダオスが私たちの世界に現れて、すでに数年になります。世界は破滅の危機に瀕し、万策尽きた我々にはもはやあなたがたに頼るしかなく……」
「ちょ、ちょっと待ってくれ」
クラースがハリソンを遮り、
「じゃあ、いまさっきの隕石は、やつが？」
と聞いた。
「やはり攻撃してきたのですね」
ハリソンは眉をひそめ、穴だらけの地面を眺め回す。

「ダオスは私が過去の世界からあなたがたを連れてくることを恐れ、攻撃したのだと思います」
「なんてことだ。死んだんじゃなかったのか!?」
チェスターがうめくように言うと、クレスはへたへたとその場にしゃがみこんでしまった。
「あの地下墓地から逃れたなんて……こうしちゃいられないじゃん」
アーチェがクレスの袖を引っぱった。
「ええ、一刻の猶予もならないのです。私とともにトールから未来に行っていただけますか」
ハリソンがたたみかける。
「もちろんです。行こう、未来へ！　まだ別れるには早いらしいな」
「はいっ」
クラースとミントが、クレスの顔を覗き込む。立ち上がったクレスに異存のあろうはずがなかった。
「チェスター、おまえも来るだろう?」
「ああ。約束は果たそうぜ」

ふたりががっちりと手を握り合うのを見て、モリスンは急いで家の中から弓矢を一式持って来た。
「チェスター、これを使ってくれ。あまりいいものではないが、手ぶらで行くよりましだろうからな」
「ありがとうございます」
「私はここで待っていよう。きっと生きて帰ってくれよ」
モリスンはくちびるの端をちょっと持ち上げる、あのやりかたで笑ってみせた。
「帰ったらクレスの両親の昔話でもゆっくりしてやろうな」
「ええ」
クレスはくったくなく笑い返す。あわただしい別れだった。

『音声認識。時空転移先空間座標、安全条件クリア。乗員は所定の位置へ――』
オズが告げていた。
「これが時空転移装置か……」
チェスターが緊張の面持ちで言う。

「ああ、行くぞ！」

クレスが親友の肩を叩いた。

やがて六人は時空転移の青い光に包まれ、四二〇二年の世界から、消えた——。

第七章

　まばゆい光のベールが解けると、クレスたちの目の前に町並みが現れた。緑の樹木の陰から、家々の屋根が覗いている。
「ここは……未来のトーティスか？」
　チェスターがあたりを見回しながらつぶやいた。
「ええ、今はミゲールという町になっていますが」
　ハリソンが頷いた。
「ミゲールだって!?」
　クレスとチェスターは顔を見合わせて叫んだ。
「ミゲールというのは僕の父さんの名前なんです！」
　クレスがハリソンに説明しようとすると、ハリソンは笑って、
「存じていますよ。ミゲール殿は、かつて独立騎士団の名剣士だったそうですね。それ

でお名前が使われたのでしょう。おお、そうだ」

と、懐から真新しい地図を出してクラースに渡した。

「これは最新の世界地図です。お力をお借りするにあたり、五十年前との違いにとまどわれぬようにと我が王からことづかりました」

「それはどうも。といっても私とアーチェにとっては、百五十年後の世界ということになるが」

クラースがさっそく地図を開くと、アーチェもやってきて覗き込む。

ハリソンは、興味深げにあたりを歩きまわっているチェスターを目の端に捉え、

「この南ユークリッド大陸には、なぜかダオスは攻撃してこないのです。ですからここは安全ですよ」

と言った。

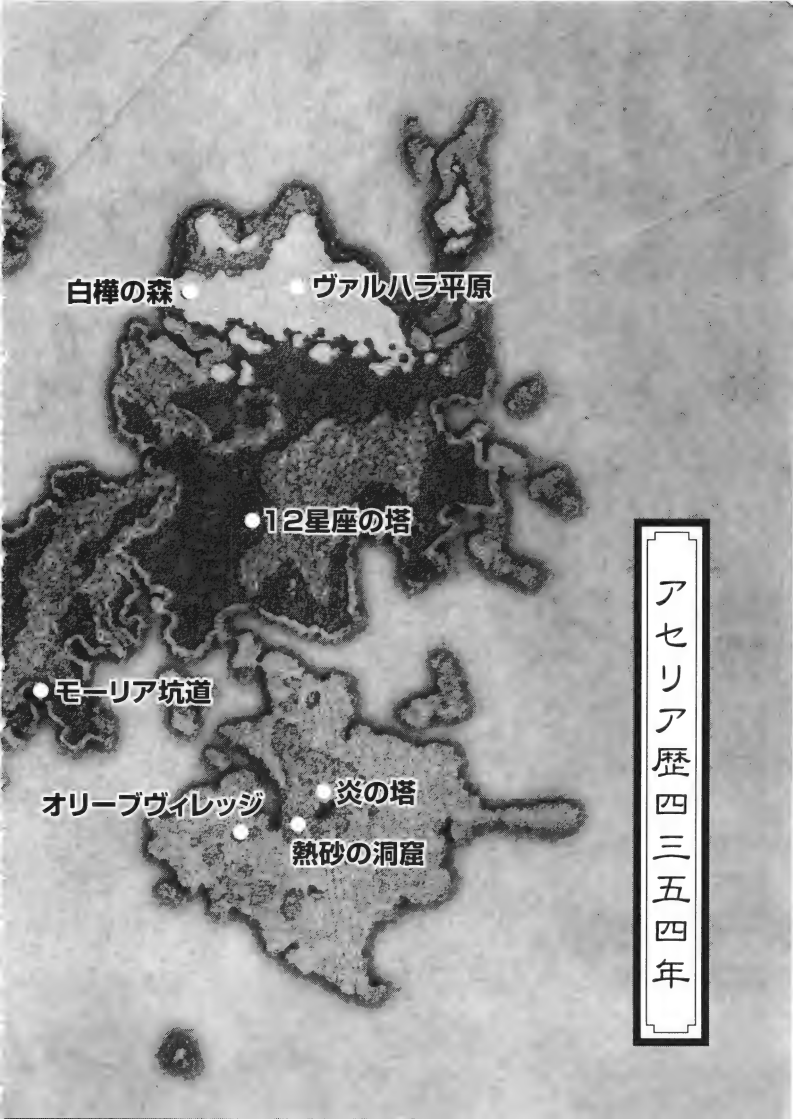
それはマナを生むユグドラシルがあるからだろう、とクレスは思う。

「これからのことですが、まず我が王に会って話を聞いていただきたいのです。船でアルヴァニスタにむかいましょう。私は先にベネツィアに行って、船の手配をしていますから、あとからおいでください」

ハリソンはそう言い置いて、急ぎ足で去って行った。

「あーあ、行っちゃったよ？」
アーチェが意外そうにクラースを見上げる。
「クレスたちに気をつかったんだよ。少しだけだぞ」
「え？」
怪訝そうなクレスに、クラースは、
「ほんとに鈍いな。ちょっとだけ、町の様子を見てきていいって言ってるんだ」
と、うんざりした口調で言う。
「ほんとですか？」
チェスターが目を輝かせた。だが、クレスはきっぱりと首を振り、
「いや、でも、そんなことに時間を使ってる場合じゃないよ」
と言う。
「そうですね。私もユグドラシルの様子を見に行きたい気がしますけど……でも」
ミントにも反対され、チェスターは切れ長の目でキッと宙を睨んだ。
「ならいいよ。クレスもミントもやけにおとなになっちまったんだな」
「なに言ってるんだよ」
クレスが苦笑する。アーチェはちらりとチェスターに視線を走らせたが、なにも言わ

なかった。
「えっ、これは!?」
そのとき、ふたたび地図に目を落としていたクラースが、大きな声を出した。
「なによ、どうしたの」
「おいみんな。この地図を見ろ。ミッドガルズがないぞ!!」
「はぁ？　なにバカなこと言って……あら、ほんとだ」
アーチェが目を丸くする。
ハリソンがくれた地図には、ミッドガルズがかつてあった場所にそれを示す文字がなかった。
アーチェはきょろきょろしていたが、木立ちの向こうから歩いてくる男の姿を見つけると、とんで行った。
「ねえ、ちょっと教えてほしいんだけどな」
「な、なんだい。見かけない子だな」
男は突然現れたピンクの髪の女の子に面食らっている様子だった。
「ミッドガルズって、どうなっちゃったの？」
「ミッドガルズだあ？　あそこはとっくにダオスに滅ぼされちまったじゃないか。いま

はわずかに廃虚が残ってるだけだよ」
「え、あ、ああ、そうなんだ。ありがとね、おじさん」
「おい、ミッドガルズがどうしたって？」
男が訊ねてきたが、アーチェはおかまいなしにクレスたちのところまで駆け戻ると、いま聞いた話を伝えた。
「そうか……ダオスのやつ……！　本当にミッドガルズを滅ぼしやがった」
クラースはギュッとくちびるをかみしめる。
「ベネツィアへ急ぎましょう。いいよな、チェスター」
「ああ、もちろんだ。勝手なこと言って悪かったな」
チェスターはクレスと並んで歩き始めた。

「ずいぶん早かったですね」
ベネツィア港の船着き場でひとりの船長と交渉をしていたハリソンは、クレスたちの姿を見つけて驚いた。
「歩き慣れた道でしたから。あんまり変わってなかったし」
クレスが言うと、ハリソンはほっと息をついた。

アセリア歴四三五四年

白樺の森
ヴァルハラ平原
12星座の塔
モーリア坑道
オリーブヴィレッジ
炎の塔
熱砂の洞窟

浸食洞
超古代都市トール
フリーズキール
ベネツィア市
西の孤島
ローンヴァレイ
ユークリッドの都
アルヴァニスタの都
精霊の洞窟
ミゲールの町
精霊の森
モリスンの家
ヴォルトの洞窟
水鏡ユミルの森
北の岬
常闇の町アーリィ

「そうですか。だが、早くきていただいてよかった。出航準備を待たなくてもよくなってしまったのです」
「どういうことだ？」
クラースの問いに、船長が口を開いた。
「このところダオスは海にも勢力を伸ばしてるんだ。すまんな、どの船も出航はできないよ」
「しかし、このままじゃあ……」
クレスたちはきらめく海の向こうをじっと睨みつけた。
海は穏やかで、あくまでも美しい。しかし、ダオスが現れるというのでは、船はあきらめるしかなさそうだった。
「なんとかならないんですか」
ミントが訴えると、さっきから考え込んでいたハリソンは「ふむ」とうなり、
「しょうがない。あそこをあたってみるか」
とつぶやいた。
「クラース殿、みなさん。あまり大きな声ではいえないのですが、ユークリッドには国営の魔科学研究所があるのです」

「魔科学研究所……ユークリッドに？」
クラースが聞き返す。
「ええ。海がだめなら空ですよ」
「空って、アルヴァニスタ王国まで飛んでくの？　遠いよ？」
アーチェが驚くと、「まあまあ」とハリソンは曖昧に笑った。
「詳しい話は研究所でしましょう」

ところが、魔科学研究所の入り口でも、ハリソンは思惑通りにすることができなかった。
何度中へ入れてくれと頼んでも、門番の衛兵たちが「関係者以外立ち入り禁止だ」と譲らないのだった。
「ねえ、このおじさんてちょっと頼りなくない？　船もダメだったし、ここじゃ門前払いされそうじゃん」
アーチェが仲間に囁いた。
そのとき、とうとう業を煮やしたハリソンが叫んだ。
「私はアルヴァニスタ王国よりの使者である！　外交官特権でも通していただけないとあ

らば、ユークリッド王に直訴するまでのこと。貴様らは処罰を免れまいが、それでもよいか」

衛兵の間にあきらかな動揺が走った。

「わ、わかりました。どうぞお通りください。スタンリー所長にご用でしたね」

「うむ」

ハリソンは胸を張って研究所の中へ入った。

「へえ〜、やるときはやるじゃん、おじさん」

アーチェが笑うと、

「なに、人生時にはハッタリも必要ですからな」

と、ハリソンは案内の衛兵に見つからないよう小声で言い、肩をすくめた。

やがて、クレスたちは地下にある広大な研究開発スペースに案内された。

「やあ、久しぶりだな。ハリソンではないか。これはまた大勢で」

恰幅のいい男が出てきて、大げさに両手を広げた。

「力を借りに来たぞ。ああ、紹介しましょう、こちらはユークリッド科学アカデミー所長のスタンリー。彼は私の友人で、ここで長年、飛行機械の研究をしているのです」

「飛行機械？　なんですか、それ」

クレスが訊ねると、スタンリーは快活な口調で、
「それはオレが説明しよう」
と、机の上のスイッチを押した。すると、音もなくクレスたちの背後の壁が床に沈んだ。
「あっ、これは!?」
そこには四機の飛行機械が整然と並べられてあった。
チェスターが思わず、
「首のない鳥みたいだな」
と感想をもらす。
「ははは。その通りだよ、お若いの。それが魔力をエネルギー源にして飛行する有人飛行機、その名も『レアバード』だ。すでに実用化されているから、すぐにも飛べるぞ」
スタンリーはクレスたちにレアバードをさわってみるよう勧めた。
「なんだかドキドキしちゃいますね。これを使えば私たちも空を飛べるなんて」
ミントがクレスに微笑みかける。
「そうだね。ああ、これで操縦するのかな」
クレスたちがわくわくしながらレアバードをためつすがめつしていると、

「それは無理だ！」
スタンリーの声が聞こえた。ハリソンとなにか話をしていたようだった。
「ダオス討伐のためとあらば無償で譲ってもやろうが、アルヴァニスタまでだと？　レアバードはそんな遠距離飛行能力は持ち合わせていない」
レアバードを撫でていたクラースは眉をひそめ、スタンリーのそばへ戻った。
「あんた、魔科学技術者なんだろう？　なんとか出力をあげる方法はないのか」
「あることはあるが……」
スタンリーはクラースに目で促され、続けた。
「いいか。レアバードは基本的に魔力を電気に変えてエネルギーとしている。だから、ヴォルトという雷の精霊の力を借りればいいというのはわかっているんだ。だが、召喚師がいない」
「いるよ。俺がその召喚師だ」
「へっ」
スタンリーはぽかんとクラースの顔を見つめた。そこへアーチェが割りこんだ。
「ねえねえ、あたしのほうきもパワーアップできる？」
「うーん。実験したことはないが、魔法使いのほうきも魔力を電気エネルギーに変えて

飛んでいるといわれているからなあ」
「可能性はあるってことだね」
アーチェはうれしそうに、にっこりした。
スタンリーは机の引出しから小箱を取り出してくると、クラースに渡した。
「これは以前、アルヴァニスタのモーリア坑道調査隊が見つけたものだ。研究用にもらったんだが、持っていくといい。サードニックスだよ」
「これは……契約の指輪！」
箱を開けてみたクラースが、
「いいのか？」
と感激する。
「いいもなにも、それがなければ契約できないんだろう？　ただし、それがどの精霊と契約するのに必要な指輪なのかはわからんぞ」
スタンリーは快活に笑い、クラースたちを研究所の門まで送ってくれた。
雷の精霊ヴォルトは、超古代文明の遺跡である洞窟に棲んでいるらしい。それはミゲールの南西にあるはずだとスタンリーに教えられたクレスたちだったが、いくらそのあ

たりをさがしても洞窟らしきものが見つからないのだった。
「困ったな。このままではいつまでたってもアルヴァニスタに行くことができないぞ」
「あ、あそこに家があります。聞いてきましょうか」
渋面を作っているクラースをはげますように、ミントが申し出た。
「すまないな」
ミントはこんもりした林の手前に建っている一軒の館まで急ぎ足で行ってみたが、すぐに、
「ちょっと来てください！」
と、叫んだ。
「どうした、ミント」
クレスが駆けつけてみると、ミントは黙って館の門柱にかかっている表札を指さした。
「ん？　ハロルド・D・モリ、スン……モ、モリスン⁉」
すぐにクラースたちもやって来た。クレスが呼び鈴を押すと、ややあって玄関のドアが開いた。
「どなたかな」
「あっ、あのっ。ヴォルトの洞窟はどこでしょうっ」

クレスのうわずった声に、アーチェが吹きだした。
「それならもっと東だが……どうした、みんなでそんなにじっと見たりして……私の顔になにかついているかね？」
「いえ……ええと。ひょっとしてトリニクスさんをご存知では」
「トリニクスは私の祖父だが……え？　まさか君たちは、おじいさんの言っていた……クレス殿とそのお仲間か……？」
ハロルドは信じられないというふうに、門の外へ出てきた。
(面影はあるけど、モリスンさんにそっくりってわけでもないよな)
クレスは頭の中でふたつの顔を並べてみる。
「申し訳ないが、私はここで普通の人間の暮らしをしているんだよ。父も祖父も立派な法術師だったが、私にお手伝いできることはなにもない」
「いや、ここへ来たのは偶然なんだ」
チェスターは顔の前でひらひらと手を振り、
「それより、せっかく会えたから聞くけど、あなたのおじいさんはなにか言ってなかったかな。オレたちがこれからどうなるか、とか」
と訊ねた。

「それは……たとえ知っていても教えられないな」
「やっぱりね。歴史が変わってしまうからな」
チェスターは苦笑した。
「いや、それだけじゃない。結果がわかったら人間は、手抜きをしたりあきらめたりしてしまうものだろう？　君たちにとって、それはよくない」
ハロルドの言葉に、クレスはハッとなった。
「それと同じことを、百五十年前にあなたの先祖であるエドワード・D・モリスンさんから聞いたことがありますよ」
ほう、とハロルドは微笑んだ。
「私の祖先がね。そうか……立場は違ってしまっても、ひとは時空を超えてつながっているということかな」
すると、今まで黙っていたミントが一歩、進み出た。
「ええ。私もそう思います。たとえ死んでしまっても、そのひとの思いは残された者に伝わると、信じています」
「そうだな。しかし、なにか困ったことがあったらいつでも来てくれ。ヴォルトのところへ行くらしいが、健闘を祈っているよ」

ハロルドはそう言い、東への近道を教えてくれた。
ほうきに乗って少し先を飛んでいたアーチェが、上空から報せてくる。
「あっ、あれじゃないかな？」
「うん、たしかに洞窟の入り口みたい……あれっ」
「どうした？」
クラースが見上げると、アーチェはすーっと降りてきた。
「誰かが倒れてるのが見えたんだけど……」
「なんだって。急いで行ってみよう。アーチェ、どっちだ？」
クレスは、アーチェと一緒に走り出した。
洞窟までの距離はいくらもなかった。生い茂る樹木のためにかなりわかりづらかったが、確かに暗い穴がぽっかりと口を開けている。
「ほら、あそこだよ。髪が長いから女の子みたいだけど……」
アーチェが指さす先には、えんじ色の変わった服を着た子供がうつ伏せに倒れていた。
「ねえ、ちょっと。どうしたの？　大丈夫？」
少女の薄い肩を揺すりながら、アーチェはふと首を傾げる。

「んあ……？　この子、いつかどこかで見たことがあるような、ないような……？？」
「う……ん」
少女は薄く目を開ける。そして、自分の顔を覗き込んでいるアーチェを認めるなり、バッと飛び起きた。
「うわっ、いたっ！　なによー、びっくりするじゃん」
「……」
アーチェはしりもちをついて文句を言ったが、少女は黙っている。まるで無表情なのだ。せいぜい十歳を越えたところだろうか、顔だちはかわいらしいのに、それを無理やり内に押し込めているような印象だった。
そこへ、クラースたちがやって来た。
「なんだ、子供じゃないか。ここは子供のくるような場所じゃないぞ。こんなところでなにをやってたんだ？」
「………………しびれてた」
少女はクラースの言葉に、そっけなく答えた。
「ははっ、しびれる？　それはオレの顔を見てからいうことだろう？」
チェスターが軽口を叩いたが、アーチェが鼻で笑っただけだった。

と、そのとき、少女が速い身のこなしで洞窟のほうへ向き直った。
「どうしたんだ急に……」
クレスは、洞窟から走り出てきたふたりの男を見て、その風体にあっと声をあげた。
男たちは揃いの覆面をし、刀を手にしている。男のひとりが刀を構えて言った。
「やはりまだ生きていたか！　ダオス様の崇高な理想がわからぬ奴に生きる資格などないわ！」
(ダオスだって⁉)
クレスたちは驚いて体を固くした。
「あなたがたこそ、忍びの掟をお忘れですか。何度も申し上げていますが、里へ戻るのです。いまならまだ頭領のお許しも得られましょう」
「断る！」
「では仕方ありません。お覚悟を……」
少女は背中にしょっていた自分の刀をゆっくりと抜き放った。
「あ、ああっ。助けなきゃ」
クレスは自分も剣の柄に手をかけたが——抜く必要はなかった。少女は目にも止まらぬ速さで空を跳び、一瞬のうちにふたりを倒して着地していたからだ。

クレスたちが目を見張っているところへ、少女が静かに歩いてきた。あれだけの動きをしたというのに、息は少しも乱れていない。
「申し訳ありませんでした。ダオスに心を操られ、忍びの里を抜けた者を追ううち斬り合いとなり、うっかり洞窟内の〝こいる〟に触れて、しびれてしまいました。助けていただいてありがとうございました」
深々と頭を下げる少女に、
「忍び……ジャポンの忍者か」
と、クラースがつぶやく。
「ああっ、思い出したっ！」
アーチェはすっとんきょうな声をあげると、あわてて服のポケットをまさぐりだした。
「ええと、あっ、あったあった。ねえねえ、見て」
それは、桜の花びら模様が染めぬかれている手ぬぐいだった。
「これは……代々、里に伝わる……忍びの女たちの持ち物ですが」
少女はふところから自分の手ぬぐいを出してみせた。アーチェのものよりずっと新しく清潔だったが、やはり模様は桜の花びらだ。

「ほんと、同じ模様じゃん。ねえ、名前は？」
「……………………すず」
「ふうん、すずちゃんかあ。あたしね、これをずっと昔にユミルの森で拾ったんだよ」
「……」
すずはどう答えればいいのかわからない様子で、ただ突っ立っている。
「それにしても、ジャポン族のような少数民族にまでダオスの手が伸びているとはな」
クラースが言うと、すずはハッと身構えた。クレスが苦笑する。
「すずちゃん。そんなに警戒しないでくれよ。僕たちもダオスを倒すために戦っているんだ。きっとやり遂げてみせる。だからきみは忍びの里に帰って待って……」
「し、失礼しますっ」
すずは最後まで聞こうとせず、くるりと背を向けると走り去った。
「あっ」
「は、速い……もう見えなくなっちゃった」
あっけにとられているアーチェの手元を見て、チェスターが顔をしかめる。
「それにしてもきたねー手ぬぐいだな」
「うるさいなっ。百五十年前の世界で拾ったんだもん、ちょっとくらいよれよれになっ

たって仕方ないじゃん」

言い返しながら、あのときの忍びの少女はすずによく似ていたなあ、とアーチェは思い出す。

(そのあとあたしは、死んだと思ってたお母さんに会ったんだよね……)

「さあ、私たちも早く行かなくては」

ミントの声に、アーチェはハッと我に返った。

ヴォルトの洞窟の内部には、不思議な装置がたくさん並んでいた。大きな筒に金属線を巻きつけたような機械の列が、延々と奥に伸びている。

「これが超古代文明の遺跡なのか？」

チェスターがもの珍しそうに装置に手を触れようとした。

「バカっ、危ないっ!!」

バチッ!!

クレスが叫んだが遅かった。装置から夥しい火花が散り、チェスターは弾かれてあお向けにひっくり返る。

「うわあぁぁぁぁぁっ！　し、しびれるぅっ」

「ふーん、これがすずちゃんの言ってた〃こいる〃か。ねえ、あたしたちはさわらないようにしようねっ！」
アーチェは聞こえよがしに言うと、さっさと先へ進み始めた。
「おい、助けてくれてもいいんじゃねーの？」
チェスターはぶつぶついいながら自力で起き上がると、
「なあクレス、オレ、どうもあのバカ女と合わないみたいだ」
と親友に耳打ちした。
「許してやってくれよ。あれで、悪気はないんだ」
「はっ、とてもそうは思えないね」
クレスはため息をつき、はらはらしながらこちらをうかがっていたミントの視線を捉えると、肩をすくめてみせた。ミントは、大丈夫ですよというように微笑んだ。
「古代の人々は、この発電装置で得た電気を動力源に使っていたのかな。すごいことだ」
クラースはひとり頷きながら、用心深く奥へ入って行った。
洞窟はあちこちで枝分かれしており、思ったよりずっと深かった。クレスたちは何度も行き止まりにぶつかっては戻るという無駄を繰り返した。
「あれ、あっちが明るいよ」

ふとクレスは太陽光が射し込んでくるのに気づいた。
「洞窟の出口でしょうか。ということは、ヴォルトはもうここにはいないのかも……」
ミントが不安そうに首を傾げる。
洞窟を出ると、そこは切り立った崖になっていた。強い風が無遠慮に吹きつけてくる。
「ちぇ、やっぱりまた行き止まりだよ」
チェスターがうんざりしたとき、ふいに断崖に立っている枯れ木の上に、黒っぽい固まりが出現した。
「なにあれ⁉　ジリジリいってるよ」
「ヴォルト、でしょうか」
アーチェとミントは、不安定な球形を保っている固まりを見上げながら言った。
「おい、おまえはヴォルトなのか？」
クラースが訊ねると、固まりはジリジリ火花を発しながら、
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊！！！」
と叫んだ。
「な、なんだ？　もうちょっとわかりやすく話してくれ。私は雷の精霊ヴォルトと契約を結びたいのだ」

「＊＊＊？　＊＊、＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊!!」
「さ、さっぱりわからん」
クラースは頭を抱えた。
「ねえ、別にいやがってる感じでもないじゃん？　指輪を出して、儀式をやっちゃえば？」
アーチェが提案すると、クラースは「それもそうだな」と、クレスがトールでひろったダイヤモンドとスタンリーに貰ったサードニックスの指輪を枯れ木の根元に置いた。
「なにが必要なのかわからんが、指輪はこれしかないからな。はずれだったら仕方ない」
クラースは目を閉じ、印を結ぶと契約の儀式を始めた。
「我、今、雷の精に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に精霊を従わせたまえ。我が名はクラース……」
「あっ、サードニックスの指輪が光りだしたぞっ」
チェスターが拳を握りしめて喜んだ。彼は初めて目にする儀式に興奮していた。
やがてヴォルトと指輪は黄味を帯びて光り輝きながら一体となり、クラースの中に吸い込まれた。
「すごい……！　けどオレ、精霊ってみんなきれいなお姉さんなのかと思ってたよ」

「僕も最初はそう思ってたけど、これがいろいろなんだよなぁ」
「しかしやっぱりきれいじゃないよりはきれいなほうが、なにかと……」
ひそひそ。チェスターとクレスは囁き合う。
ふたりの背後から咳払いをしたのはミントだった。
「クレスさん、チェスターさん。置いていかれたいの?」
「あ、いや」
「い、いちばんきれいなお姉さんはやっぱミントだろう。なっ、クレス」
「え? ああ」
あわてるふたりに、ミントは、
「知りませんっ」
と背中を向けた。

ユークリッドの国営科学アカデミーの地下研究室では、ハリソンがじりじりしながらクレスたちの帰りを待っていた。
「おお、どうでしたヴォルトは?」
クラースの顔を見るなり、飛びつかんばかりにそばにやって来た。

「なんとかうまく行った。さっそくやってみよう」
クラースはレアバードの最終整備をしていたスタンリーに頷いてみせると、
「出でよ、ヴォルト！」
雷の精霊を召喚する。アーチェがあわててレアバードの横にほうきを置いた。
「ヴォルト。ここにある飛行機械とほうきにおまえの力を注ぎこんでほしいのだ」
「＊＊＊？」
「……わかるか？」
「＊＊＊＊＊＊＊!!」
ヴォルトは天井近くでジリジリと音をたてた。
「おい、大丈夫なのか」
スタンリーが思わず口をはさんだとき、ヴォルトは強烈な光をレアバードとほうきに向けて放射した。光は数秒で見えなくなり、ヴォルトの姿も消えた。
「……これはすごい」
さっそくレアバードのパワーを調べていたスタンリーはうなり、ハリソンに、
「オレが乗って行きたいくらいだ」
と笑ってみせた。

緑濃い大地。きらめく海――。眼下の景色が猛スピードで後ろに流れてゆく。
「ひゃっほー、サイコー！　ヴァルハラを思い出しちゃう！」
パワーアップしたほうきで飛びながら、アーチェが両足を伸ばして叫んだ。
「こっちもすごいよ！」
クレスも大声で応えた。その声はたちまち風に呑まれる。
レアバードの操縦は決してむずかしくはない。クレスは自分の後ろにミントとクラースがぴたりとつけているのを確認した。
「なあ。なんで私たちだけふたり乗りなんだよっ」
クレスの後ろで窮屈な思いをしていたチェスターが叫んだ。
「しょうがないだろ、先に出発したハリソンさんが一機使ってるんだから」
「どうせなら女の子と乗りたかったよなー」
チェスターはちらりと背後のミントに視線を飛ばして言う。
「アーチェのほうきもふたりまでOKだぜ」
親切に教えたクレスの後ろ頭を、チェスターは無言でパシッと叩いてきた。
しょうがないな、とクレスは苦笑する。

やがて、前方にアルヴァニスタ王国が見えてきた。
アルヴァニスタ城の前庭に着地したクレスたちは、そこで待ち受けていたハリソンにレアバードをまかせ、急ぎ謁見の間に通ることになった。
そこでクレスたちを迎えてくれたのは、懐かしいルーングロムだった。
「あっ、あなたは！」
ミントが驚きの声をあげる。
誰だ？　とチェスターがクレスを突ついた。
「過去で会った人なんだ。ここの宮廷魔術師のルーングロムさん……ああ、これは親友のチェスターです。僕の時代の」
チェスターは軽く頭を下げる。
「しかし、まさかまた会えるなんて思ってもいなかったなあ」
ルーングロムはクレスの手をとり、
「だてにエルフの血は流れていないのでね。長生きしてるだろう？」
といたずらっぽく笑った。
「ほんとにちっともお変わりなく」

ミントが微笑む。
「こんな形で会いたくはなかったが、とにかく王の話を聞いてくれぬか」
一行はルーングロムに促されて、玉座の前へと進んだ。
「国王様、過去からの使者五人を連れて参りました」
王は「大儀であった」と鷹揚に頷き、クレスたちの顔を順に眺めると、話しはじめた。
「ハリソンから聞いておるとは思うが、ダオスは今や全世界の脅威となっておる。あやつに時空転移の力がある限り、イタチごっこが永遠に続くのは明らかだ。しかし、我々とて、ただ漫然と戦い続けてきたわけではない」
「と申されますと？」
クラースが訊ねた。
「トールの遺跡――そちたちが復活させたと聞いておるが――そこから発見された超古代の遺跡から、問題を解決するカギとなるかもしれない情報が得られたのだ」
「ほ、本当ですか!?」
クレスは思わず身を乗り出した。
ああ、と王は頷いた。
「詳しい話はルーングロムから聞いてほしい。しかし……こんなに若い者たちがダオス

を倒すとは……。そちたちの話は伝説となって我が国に伝えられておるのだ」
「へっへえ」
アーチェがうれしそうに、でれっとした。
「今夜は城内でゆっくりと休むがよい。吉報を待っておるぞ、勇者たち」
王の慈愛のこもった口調に送られて、一行は謁見の間をあとにした。

「食べながらでいい、よく聞いてくれ」
夕食のテーブルで、ルーングロムがナプキンを広げながら言った。来賓用のダイニングルームには彫刻や絵画が惜しげもなく飾られている。
国王付きのシェフが腕によりをかけて作ったという数々の料理は、どれもすばらしいものだった。はるばる過去の世界からやって来た勇者をもてなしたいという気持ちがこもっているようだ。
とにかく破格の待遇であることは間違いなかったが、裏を返せばそれだけこの世界がせっぱつまった状況にあるといえるのだった。
「すっごーい！　こんなごはん、今度いつ食べられるかわかんないよねっ」
さっそく骨付きの肉にかぶりついたアーチェが、幸せそうに目を細める。クレスたち

も遠慮なく食事を始めることにした。
「先ほど王の話にあったカギだがな。おぬしらは、超古代と呼ばれる数千年前、三つの大国によって大陸の覇権が争われていたのをご存知か？　トールとオーディーン、そしてフェンリルだ」
「オーディーンですって⁉　僕が以前レアード王子を助けたとき国王にいただいた槍・グーングニルは古代神オーディーンの持ち物だったんですけど」
「ああ、あれか。覚えているよ」
ルーングロムは頷いた。
「三国ともそれぞれが崇拝する神の名を国名にしていたんだ。このたびトールで見つかったのは古文書なのだが、それによると、三国の最終戦争の際、謎の男たちが使っていた三種の武具があったという」
「三種の武具？　もしかして、それがあればダオスを倒せると？」
クラースがかちゃりとフォークを置いた。
「ああ。その武具を融合させることで時間を操る魔剣へと変化するらしいのだ」
「つまり、ダオスの時空転移を封じることができるんですね？」
「そういうことだ。おぬしらには、その〝時間（とき）の剣〟を手に入れる旅に出てもらいたい」

そのとき、海草サラダを食べていたミントが口を開いた。
「武具というのは具体的にはどういう……」
「文献によるとだな、まずフランベルジュなる炎の剣だ。オーディーンのものだが、かつてフレイランドの火山地帯にあったことをつきとめ、すでに数か月前に兵を出してある。もう戻ってもいいころなのだが……。次はフェンリルのヴォーパルソードという氷の剣。これは最近、現在のフリーズキールという町がある場所にかつての国があったことがわかった。が、まだ手つかずのままなのだ。そして……いまひとつはっきりしないのが最後の精霊契約の指輪、ダイヤモンドだ」
「え」
クレスがパッと顔をあげてクラースを見る。クラースはすぐさま革袋からダイヤモンドの指輪を取り出した。
「おお、これをどこで!?」
ルーングロムは驚愕の表情でダイヤモンドを受け取り、しげしげと見つめた。
「トールで僕が拾ったんです」
「そうか、やっぱりトールにあったんだな。ふむ、クレス殿が先に見つけていたとはね」
ルーングロムは感心したように首を振り、それから、

「なんだ、粉がついてるな」
と指輪をフッと吹いた。
くくくくっと笑ったのはアーチェだ。
「ルーングロムさん、それ、チェリーパイの粉だよ。クラースが愛しちゃってるの～」
「ほう」
「なっ!? なにをいうんだ、アーチェ！」
クラースがあわてる。
ルーングロムは片手をちょっと上げ、控えていた給仕を呼ぶとなにごとか囁いた。給仕は一礼してすぐに出て行った。
「ともかく、一刻を争うのだ。手に入れるものがひとつ減っただけでもありがたい。明朝早く、できれば手分けして出発してもらえるだろうか」
「ああ。精霊と契約するわけではないから、ふた手に分かれてもかまわない」
「じゃあ僕は手つかずだという、フェンリルのあった場所へ行きましょう」
クレスが力強く申し出た。
「それではあとでフリーズキールのくわしい地図と、少しだが資料を届けさせよう。フレイランドへはハリソンが行くことになっている。剣を手に入れたらいったんここに戻

ってくれ。武具の融合はヘイムダールで行うことになる」
オリジンの石盤かな、とクレスは思った。
「危険な旅になるだろうが、世界を救うために頑張ってもらいたい」
ルーングロムはそう言うと、席を立った。

「きゃはははははっ！！！」
城の中に用意されたふた間続きの立派な寝室で、アーチェがけたたましく笑っていた。
たった今、ルーングロムからの資料の書きつけと一緒に焼きたてのチェリーパイが届けられたのだった。
「粋なはからいってやつですか」
クレスから事情を聞いたチェスターが、にやにやする。
ミントはさっそく切り分けたパイのひと切れをすすめたが、仏頂面のクラースは頑として拒んだ。アーチェはあきれ、
「なによ。別にミラルドさんの名前を出したわけじゃなし、ただの好物と思われただけだよ。ひとの好意を素直に受け入れられないのは、おとなじゃないじゃん？」
パイを手摑みにすると、クラースの口にぐいと押し込む。

「ぐむっ!?」
クラースは目を白黒させていたが、すぐに何ともいえない情けない顔で怒り出した。
「こ、こんな甘ったるいもんがパイといえるか!? よけいなこと言いやがって!」
「まーこわい」
アーチェはひとり、さくさくとパイを嚙んだ。
「おいし〜い。バターの香りとチェリーの甘ずっぱさがなんとも……。みんなも食べなよ」
「待ってましたっと」
チェスターがさっそく手を伸ばした。
「かーっ! さっさと明日からのことを決めて寝るっ!」
クラースはわざわざいちばん遠くにおいてある椅子まで行って腰かけると、ルーングロムの書きつけを広げて読み始めた。
翌朝早く、アルヴァニスタを発つクレスたちが城の庭に出て行くと、きちんと並んだレアバードの傍らで、ハリソンが待っていた。彼はスタンリーから預かったというウイングパックをクレスにふたつ渡してくれた。一見ただの小さなカプセルだが、レアバー

ドを分子レベルまで細かくして吸い込み、保存して持ち歩くことができるという便利なものだった。
「クラース殿が私に同行してくださるそうで、まことに心強い」
「なに、手つかずのフリーズキールに腕の立つ仲間を送りたいだけさ。頑張れよ」
クラースはクレスたちにそう言い残すと、ハリソンと並んで先に飛び立って行った。
クレスたちは、北のフリーズキールへと飛んだ。一年の半分以上が雪に閉ざされているらしいが、現在もその季節なのだろう。一行が歩くたびに、その足は膝まで雪に埋もれた。
「北側にあるフェンリルという古い教会へ行ってみるんでしたね」
レアバードをウイングパックにしまってから、ミントは昨夜のクラースの説明を思い出して言う。
「ああ。あれがそうか？」
チェスターが指さしたのは、いかにも不気味な建物だった。高く聳(そび)える塔の中ほどには、なぜか目をかたどった装飾がついており、下界をじっと監視しているかのように見える。

入り口のドアに近づいて様子をうかがっていると通りがかりの町の人間がみな、ぎょっとした顔で去ってゆく。
「とにかく入ってみようぜ」
扉はかたく封印されているようだったが、チェスターが叩いてみると、バラバラと崩れ落ちた。中へ入ったクレスは、思わず「うわあ」と声をあげた。
それは天まで続いているかと思わせるほどの、圧倒的に巨大なステンドグラスだった。だが、どんよりした雪空のため、日光はほとんど入らない。せっかくの芸術もただの冷たいガラスの固まりだった。
「クレス、気をつけろっ！　祭壇の上になにか見えるぞ」
チェスターが鋭く叫ぶ。クレスが目を凝らすと、なるほど埃をかぶった祭壇に、青味がかった半透明の獣の影が浮かんでいた。
(狼か!?)
「誰だ、おまえはっ！」
『我が名はフェンビースト、氷の剣を守護する者。聖なる極寒の地に近づけば死が訪れるであろう』
「死が？　それでも僕らは命をかけてやらなければばらない。時間の剣を作るために、氷

の剣が必要なんだ！」
『ならぬ。我が御神刀にはフェンリル様の魂が封印されているのだ。渡すわけにはいかん！』
フェンビーストの影がゆらりと揺れたと思うと、祭壇の向こうへ消えた。クレスたちが用心深く近づいてみると、そこにはぽっかりと穴があいており、凍りつくような風が吹きだしていた。
「洞窟の入り口みたいだな。行こう！」
クレスたちは次々と穴の中に飛び降りた。
「きゃ、氷の柱がいっぱい！」
アーチェが白い息を吐きながら、ほうきの柄で柱を叩く。キンキンと澄んだ音がした。と、そのときだった。洞窟の奥で恐ろしい遠吼えが聞こえたと思うと、獣の走り寄る気配が近づいた。
ビシュッ！
「氷の矢だ！　気をつけろ！」
クレスが剣を抜き、実態を現した巨大な狼に斬りかかる。
「紅蓮剣っ！」

「なあに、矢には矢を、だよ」
チェスターは弓に矢をつがえると、狙いを定めて射た。
シュッ！
だが矢は大きくそれ、氷の柱に当たって跳ね返る。砕けた氷の破片がチェスターの頬をかすめて跳んだ。
「へったくそっ！　レイ！」
アーチェの指の先から出た無数の光の筋が、しっかりと狼を捉えて包んだ。
ジジジジ……ッ！
「いいぞ、アーチェ！　鳳凰千裂破っ！」
狼は苦しげに吼えながら、氷の上を滑った。
『うう……ふっ、貴様らのような人間に命を預けろと？　それもよかろう』
フェンビーストはクレスをまっすぐに見つめ、耳まで裂けた口でニヤリとした。
『さあ、受け取るがよい。氷の剣を！』
「あっ」
フェンビーストはとろりと溶けたかに見えたが、次の瞬間、冴えざえとした青い光を放つひと振りの剣に変身した。クレスはおそるおそる剣を拾い上げる。

（これが三種の武具のひとつか……）
剣は古代からの時が詰まっているかのように、ずっしりと重かった。
「くっそう」
チェスターが背後でくやしそうに舌打ちした。
「どうした」
クレスが振り返ると、彼は血が滲んでいる頬の傷をミントに見てもらっているところだった。ヒール、とミントが優しく唱えると、傷はすぐに癒えた。
「弓が狂ってるんだ。俺の愛用してたあの弓さえあれば、狙いをはずすことなんてなかったのに！」
「どうだかねぇ。弓のせいにしちゃって」
アーチェがくすりと笑いを漏らす。
「なんだと!?」
チェスターはカッとなり、モリスンに持たせてもらった弓矢一式を氷の上に叩きつける。
「まあまあ。氷の剣は無事手に入ったんだ、ルーングロムさんのところへ戻ろう。こんな寒さの中にいつまでもいたら風邪ひいちゃうよ」

クレスは親友の肩をなぐさめるように抱くと、派手なくしゃみをひとつした。
「うー、なんて暑さだ！」
フレイランドのオリーブヴィレッジに着陸したクラースは、吹き出す汗を拭いながら、顔をしかめた。
「相変わらずだな、ここは」
「あっ、クラース殿。あれが炎の塔です」
ハリソンが、遠くに見える塔を指さす。赤く、燃えるような色をしているのだが、かげろうのために揺らめいて見える。まるで本物の炎が天を焦がそうとしているかのようだった。
「あそこに炎の剣があるんだったな。よし、行ってみよう」
ふたたびレアバードで移動したふたりは、塔の外壁に抱きつくようにして倒れているひとりの男を発見した。男はアルヴァニスタの紋章の入った兵服に身を包んでいた。
「おい、しっかりしろっ！　他の連中はどうしたっ」
ハリソンが駆け寄り、兵士を抱きかかえる。うっすら目をあけた兵士は、
「おお、ハリソン殿……よかった……。つい昨日、ようやく敵を倒し、炎の剣を手に入

れました。そこに埋めてあります……」
クラースが急いで熱砂を掘りはじめた。素手が灼けるようだ。
「仲間は全員、剣を守っていたフラムベルクにやられました……」
「あったぞ！」
クラースは砂の中からずっしりと持ち重りのする剣を取り出した。刃全体がチロチロと燃えているように見える。
「クラース殿」
ハリソンは、すでに死相が表れている兵に水を飲ませながら言った。
「その剣は我がアルヴァニスタの兵士たちが、命にかえて手に入れたもの。先にそれを持ってお帰りください。私はあとから参ります。一刻もはやく融合を！」
わかった、とクラースは立ち上がり、気力だけで持ちこたえている兵に一礼した。
「力になれなくてすまなかった」
「いえ……ダオスを、必ず……お願いします」
クラースは頷き、ひとりレアバードに乗り込んだ。
アルヴァニスタのルーングロムは、無事に三種の武具が揃ったことを大変喜んだ。

「よくやってくれた。さあ、これを持って水鏡ユミルの森のエルフの集落へいってくれ」
氷の剣、炎の剣、ダイヤモンドの指輪が並べられたテーブルの前を何度も行き来しながら、彼はちょっと考え、
「いまからだと着くのが夕方になるが……かまわんよな」
と訊ねる。
「ええ、もちろんです」
クレスは頷き、
「ところで、エルフの集落に入るためには、たしかアルヴァニスタのエンブレムが必要でしたよね」
と思い出しながら言った。
「いや、最近はいろいろあって人間の行き来も増えていてな。もう自由に入れるから心配はいらない。ただし、ハーフエルフに関しては相変わらずなのだ」
ルーングロムは、アーチェにじっと視線を注いだ。以前不法侵入してエルフに捕らえられ、もう少しで死刑になるところだったということを聞き知っているようだった。
「いいよ。あたしここで待ってる」
アーチェはあっさりと言い、

「もしお母さんに会ったらよろしく伝えてよ」
と笑った。
「こんどは本当だろうな」
「しつこいよ、クラース。さあ、早く出発して」
アーチェは三種の武具をかき集めるとクレスに押しつけた。

アルヴァニスタを西よりに南下し、水鏡ユミルの森に到着したのは、ルーングロムの言った通りもう陽も暮れかかるころだった。
さざ波が涼しげに湖面を渡る風情は昔と変わっていない。迷路のように巡らされた橋を渡って森に入ったが、警備の衛兵はクレスたちの中にハーフエルフがいないとわかると声もかけてこなかった。
「暗くなってきましたね」
ミントが心細そうに空を見上げる。
「宿に泊まって、明日の朝へイムダールへ入るとしよう」
クラースの判断で、一行は宿に泊まることになった。
宿は、人間の商人も泊めるようになったせいか、繁盛しているようだった。受付で順

番を待ち、部屋があるかどうか聞こうとしたクレスは、
「いらっしゃいませ」
と、笑顔で迎えてくれた女主人を見て驚いた。アーチェの母、ルーチェだったのだ。
「あなたは……！」
「アーチェの！」
クレスとミントが同時に大声を出すのを、ルーチェは柔らかく遮り、
「お久しぶりです」
と微笑んだ。そして傍らにいたエルフの女の子にあとをまかせると、クレスたちにティールームで待っていてくれるよう頼んだ。
「いまのがアーチェの例の母親なのか」
チェスターが丸いテーブルに頬杖をつきながらつぶやいた。
「ああ。もっとも百五十年前は厨房で働いてたっけな」
「出世されたんですね」
ミントが微笑む。
と、ルーチェが小走りに戻ってきた。
「お待たせしました。実はお願いがあるのです。あのときのピンクの髪の女の子に会う

ことがあったら、これを渡してやってはいただけないでしょうか」
「アーチェに？」
ルーチェは答えず、うすピンクをした真新しいひと揃いの手袋と、小さな人形をテーブルに置いた。
「この人形は私が作ったのですが……不器用なもので恥ずかしいですわ……」
「まあ、かわいらしい」
ミントが控えめな歓声をあげる。人形はひと目でアーチェをモデルにしたものとわかった。ピンクの髪と赤い瞳が愛らしい。
「あのう、アーチェならいまアルヴァニスタ城にいますけど？」
クレスが言うと、女主人はきっぱりと首を振った。
「それ以上はどうかなにもおっしゃらないでくださいな……。お部屋はいますぐ用意させます。それではごゆっくり」
ルーチェは軽く会釈すると、仕事に戻って行った。
「いいですね、お母さんって。渡せるかどうかもわからないのに、アーチェさんのために……こんな」
ミントは鳶色の瞳にうっすら涙を浮かべ、手袋と人形をそっと撫でた。

ひとり静かに本を読みたいというクラースを残して、クレス、チェスター、ミントの三人は夕食までの時間を集落の散歩にあてることにした。
「ずいぶん店が増えたなあ」
「前はもっと静かな集落でしたよね」
歩きながらクレスとミントは頷きあう。
「食料、雑貨、薬に、ふーん、武具屋か」
チェスターはもの珍しげに店を順番に指さしていたが、武具屋の店先に大きな装飾用の弓が飾られているのを見つけ、足を止めた。
クレスはすかさず親友の袖をつかむ。
「入ろうぜ」
「あ、ああ」
三人が店に入ると、若いエルフの店員が迎えてくれた。クレスは真っ直ぐにカウンターに近づくと、訊ねた。
「ちょっと聞きたいんだけど。弓の修理はやってますか？」
「もちろんだよ。腕には自信があるんだ」

と、エルフ。
「おい、クレス。オレのこのヘボ弓は修理したって直りゃしないよ」
あわてて口をはさむチェスターを、クレスは脇へおしやった。
「これなんだけど、直せるかな」
「あああっ!!」
チェスターはクレスがマントの下から取り出したものを見るなり大声で喚いた。
「こっ、これはオレが地下墓地でなくした弓っ！　なんでクレスが」
「ああ、これは確かにおまえの弓だ。僕とミントが過去の世界に時空転移したとき、そばに落ちていたんだ。壊れてしまっていたけど、いつか役に立つんじゃないかと思って、実はずっと隠し持ってた」
クレスは照れくさそうに笑い、バラバラに壊れた弓をカウンターに並べた。
「わかりました、やっと……」
ミントがハッとした。
「あのとき……元の時代に戻るためにトールに向かう前、精霊の森に私たちを待たせたのは……この弓を取りに行くためだったんですね」
「まあね」

「こいつ、いままで黙ってやがってひでーやつだな」
チェスターが睨む真似をした。
そのとき、弓を調べていたエルフが「うーん」と唸った。
「直りそうかな」
「ああ。旧式だがとてもいい弓なんで感心していたんだ。一日もらえれば最新式のエルヴンボウに再生できるけど、急ぐなら明日の朝までになんとかしよう」
エルフは夜明けまでに弓を宿に届けておくと約束してくれた。
「ああクレス、オレはおまえのような友をもって幸せだ！」
店を出るなり、チェスターはクレスに抱きついた。
「ちょ、ちょっとやめろよ、恥ずかしい。しかしこれで百発百中のチェスター復活だな」
「そんなことより、あのバカ女に『へったくそだなあ』とか言われなくてすむと思うと、涙が出るよ。へっ！　見てろよ～」
クレスはミントと視線を合わせ、苦笑してしまう。
(ま、いいか。これで気にかかっていたことのひとつは片付いたんだ。残るは……)
クレスはチェスターに抱きつかれたまま、法衣に身を包んだミントの長い髪に目をやった。さっき彼女がアーチェの母の心遣いに涙していたことを思うと、胸がしめつけら

れるように痛むのだった。
トレントの森はまだ靄の中に沈み、まどろんでいるようだった。翌朝早く宿を発った四人は、ヘイムダールへ向かった。
「エルフの聖域へ入るにあたって、族長のブラムバルドに挨拶をしておこうかと思ったら、しばらく留守らしいんだ。根源の精オリジンのことを聞きたかったんだがな」
クラースが湿った落ち葉を踏みしめながら言う。
「石盤の中に眠っているといわれているって、前にブラムバルドさんは説明してくれましたよね」
ミントが応えると、クラースはちょっと振り返って頷いた。
「ああ。それが本当なら契約もできるかもしれないだろ。まあ、行ってみるしかないが」
チェスターはいまさっき受け取ったばかりのエルヴンボウを撫でたりさすったりしながら、鼻歌まじりで歩いている。修理代金はクラースが出してくれた。
やがて見覚えのある、夜の闇より濃い色をした漆黒の石盤が見えてきた。
「なんだか懐かしいな」
クレスがため息をつきながら、石盤を見上げていたときだった。頭上をなにかがさっ

とかすめて通った。
「え？　ああっ、アーチェ!?」
「へっへえっ、やっぱり来ちゃいましたぁっ！」
「なるほど。空からとは考えたな」
クラースが苦笑する。
「ヴォルト様さまですよ～」
「ふん」
ストンと着地し、へらへら笑うアーチェを、チェスターが睨みつけた。
「おまえなあ、前に一度ここで捕まって死にそこなったっていうじゃないか。それをまたのこのこやって来て……仲間に迷惑かけるかもしれないとか思わないのかよ」
「うるさいなあ」
アーチェも負けずに睨み返す。
と、そのとき漆黒の石盤の上に人影が浮かんだ。
「おい、ケンカしている場合じゃないぞ。オリジンのお出ましらしい。やっぱりここにいたんだ」
クラースがじりっと石盤に近づいた。

『炎と氷の封印を解き放ち聖域に現われたる者よ！　覚悟はよいか‼』
「の、望むところだ！」
ザッ、とオリジンが跳んだ。
「うわあっ！」
クラースは風圧で近くの木の幹にいやというほど叩きつけられる。
「クラースさんっ」
ミントがあわてて駆け寄った。
「くそっ。僕が相手だ、飛燕連脚っ！」
「なんの」
オリジンはクレスの剣をひらりとかわすと、両手に持った槍でビュンビュンと突いてきた。
「くっ」
クレスは地面を転がりながら、かろうじて槍の先から逃れる。
チェスターはすばやくあたりの木の枝を物色していたが、
「アーチェ、オレをあの太い枝まで運んでくれっ」
と、大木を指さしながら叫んだ。

「はあ?」
「いいから早くしろっ!」
「わかったわよっ」
チェスターはほうきの後ろに乗って水平に張り出した木の枝まで登ると、エルヴンボウに矢をつがえて引き絞る。
ビシュウウッッ――――!
矢は少しの狂いもなく空を切り裂き、オリジンのぼんのくぼを射抜いた。
『ぐうっ!!』
根源の精霊の体がうつ伏せに倒れかかる。
「うっそー、命中じゃん?」
アーチェが真紅の瞳をまん丸に見開き、チェスターとオリジンを交互に見た。
「はんっ、これがオレのいつもの腕なんだよっ。クレス、今だっ!」
「おうっ! 虚空蒼破斬!!」
刃をまともに受けたオリジンは、とうとう槍を放り出し、
『わ、わかった。望みを言うがいい』
と、体勢を立て直していたクラースに向き直った。

「望みはふたつ。召喚の契約を結びたい。そしてその前に時間の剣を作り出してほしい。そのためにふたつの剣の封印を解いたのだからな」
『訳を聞いてもいいか。何故にそう望む』
オリジンは真っ黒な瞳をヒタとクラースに当てて問いただした。
「もちろんダオスを倒すためだ。時間の剣がなければ、あいつはまた逃げるだろう」
『ダオス、か。たしかに今あやつは世界の脅威となっておるからな。ふふふ……』
オリジンはなぜかそこで笑いを漏らした。
「なにがおかしいんだ」
チェスターがムッとする。
オリジンはクレスたちをじっと見つめながら挑戦的な口調で言った。
『おまえたちは、ダオスがどういう奴なのか考えてみたことがあるのか？　なぜこんなことをしているのか、そもそもどうしてこの星に来たのかを』
「この星!?　じゃ、もしかしてダオスって別の星からきたの？」
アーチェはオリジンの意外な言葉を耳にし、驚きのあまりぽかんと口をあけたが、それはクレスたちも同じことだった。
（ダオスが別の星から……？　時間だけじゃなく、距離も超えるっていうのか、あいつ

は……まさかな）

『まあ、よかろう。時間の剣を作ろうではないか。剣とダイヤモンドの指輪を石盤の前に置いて下がりなさい』

オリジンは、これ以上ダオスについて語るつもりはないらしかった。

クレスが呆然(ぼうぜん)としながらも言われた通りにすると、すぐにふた振りの剣が輝きだした。輝きはまばゆい光となってダイヤモンドに吸い込まれてゆく。ややあって光がおさまると、そこにはひと振りの新しい剣が静かに身を横たえていた。

「これが時間の剣……」

クレスがゆっくりと剣を手に取った。

（時を操ることのできる剣、か……。よし、これで必ずダオスを倒し、世界を救ってみせるぞ！）

「さあ、次は私の番だ」

クラースは剣の横にそのまま置かれていた指輪を示すと目を閉じ、印を結んだ。

第八章

「やあ、すっかり待たせてしまって申し訳ない」
アルヴァニスタ城の小部屋に通されていたクレスたちのもとへ、ルーングロムがばたばたと急ぎ足で入ってきた。
「なんだか城の中があわただしいようですね」
クレスの言葉にルーングロムは頷き、
「ああ、いまから説明しよう。その前に見せてはもらえないかな、エターナルソード――時間の剣を」
と、真紅の目に満ちた期待を隠そうともしない。
「これです」
クレスが剣を差し出すと、彼は慎重に受け取り、じっくりと眺める。
「……さすがに美しいものだな」

「それより、私たちはいまからすぐにでもダオスを倒すために出発したい。現在のダオスの居所を教えてもらいたいのだ」
クラースが焦れた。ルーングロムはクレスに剣を返すと、相当使いこんだ感じの地図をテーブルに広げた。
「問題はそこなのだ。もちろん、以前居城があった場所にあやつはいない。実ははっきりしたことはわからんのだよ」
「ええっ、それじゃどうすんのよ!?」
アーチェが大げさに驚いてみせた。
「まあまあ、手がかりはちゃんとある。この世界には数年前から、常に闇に閉ざされた空間ができあがっているのだ。もとはなんの変哲もなかった鉱山の町をまるごとひとつ飲み込んでな。アーリィというのだがご存知か?」
「いや。初耳だ」
クラースが首を振ると、ルーングロムは地図に印をつけて一行に示す。アーリィは水鏡ユミルの森よりも、さらにずっと南に位置していた。
「このあたりだそうだ。我々が場所を特定してから派遣した調査隊のうち、約半数がさっき帰国したばかりだったので、国王と共に情報を聞いてからここへ来たというわけ

だ」
　それでなんとなく城の中があわただしい感じだったんだな、とクレスは納得した。
「結論から言って、はっきりしたことはなにもわかっていない。だが私の感じとしては限りなくクロなのだよ。時間を操るほどのダオスのことだ、普通では見えないような空間に自身の拠点をかくしているということはじゅうぶん考えられるだろう？」
　なるほどね、とクラースは顎を撫でた。
「それじゃあ、常闇の国とやらに行ってみるか」
「よろしく頼む。ああ、出発の前にクラース殿とクレス殿は謁見の間へ行ってくれ。国王が会いたがっているんだ」
「わかりました」
　クレスは時間の剣を持つとクラースと一緒に小部屋を出て行った。
　残された三人はしばらく手持ちぶさたにしていたが、やがてミントがアーチェを呼んだ。
「あのう」
「なに？　なんかくれるの？　おなかすいたよねっ」

ミントはよだれをたらさんばかりの表情で、胸の前に指を組む。チェスターはあきれ、ため息をついた。
「あ、いえ……ごめんなさい、食べ物ではないんですけど」
ミントは苦笑しながら、いつ渡そうか迷っていた手袋と人形をテーブルの上にそっと乗せた。
「アーチェさんのお母さんから預かってきたんです。あの宿の女主人になっていらっしゃいました」
「……」
アーチェは答えず、すごい形相で人形を睨みつけていた。
「あの……私、余計なことをしたんでしょうか。あの」
「そうか。やっとわかった」
アーチェは人形を握りしめるとバッと顔をあげ、
「あたしが不器用なのは、てっきりお父さんに似たんだと思ってたけど……お母さんもそうなんじゃん？」
と、くやしそうにつぶやく。
「ねえ、ミントもそう思うでしょ。あたしってもっとかわいいよねえ」

「……はあ、でもアーチェさん、そういう問題ではないのでは……」
するど、黙って聞いていたチェスターが口を開いた。
「おまえねえ、もっと素直に喜べないのか？　せっかくおふくろさんが作ってくれたのによ」
「うっさいなあ。あんたなんかに、ごちゃごちゃ言われたくないっ」
「ははん？　ヘイムダールでオレの弓の腕を見なかったのか」
チェスターが得意そうに胸を反らすと、アーチェはきゃらきゃらと笑いだした。
「あんたのそのおニューの弓、エルヴンボウでしょ？」
「……ああ、武具屋がたしかそんな名前を口にしてたが。それがどうした」
「知らないの？　エルヴンボウはエルフの聖弓。どんなへたっぴが引いても、狙いははずれないんだよ。オリジンに命中したのも弓のおかげだってば」
「馬鹿なっ！」
チェスターは真っ赤になって怒ったが、アーチェは取り合わなかった。
「ああ、笑いすぎたら涙がでちゃった」
アーチェはほうっと息をつくと、手袋と人形をぎゅっと抱きしめた。
「ミント、ありがとね。あたし、思うんだ。エルフの集落に人間が入れるようになった

んだもん、いつかきっとハーフエルフもＯＫっていう日がくるよ。それまであたし、会えなくてもお母さんのこと思いつづける。お母さんがあたしを大事に思ってくれてるように……」
「アーチェさん……」
「へっ、聞いてらんないぜ」
チェスターが立ち上がり、小部屋を出て行く。廊下に出てから、そっと涙を拭った。
(なんでだろうな。アミィの顔が浮かんできちまった……)
彼はしばらく壁にもたれ、ダオスのために命を落とした妹を想った。

アルヴァニスタ王に激励され、戻ってきたクレスたちは、すぐに出発することにした。
「見送りはけっこうです。もしかしたらこれが最後になるかもしれませんが……」
「ああ、頼んだぞ」
クラースとルーングロムは固い握手をかわしたが、そのあとはまるでまた明日顔をあわせる友人どうしのように、さりげなく別れた。
城の庭でウイングパックから出したレアバードに乗り込むと、一路南を目指して速度を上げる。

常闇の町アーリィは、夕闇に沈もうとしている南端の大陸の、ひときわ暗い地帯にあった。上空から見ると、真っ黒な怪物が恐ろしい口を開けて飲み込もうとしているようにも感じられるのだった。

アーリィに着陸したクレスたちは、まずその厳しい寒さに震えあがることになった。身を切るような冷たい風に乗って、雪が舞っている。

「さ、さみいっ！　見ろよ、こんなに積もってる。なんで南がこんなに寒いんだよ」

チェスターはかちかちに凍った足元の雪を蹴飛ばした。

「闇に閉ざされているんだ、仕方ないよ。とにかく宿屋をさがして暖まろう」

クレスはあたりを見回した。すると、はるか向こうに暖かそうな火が見えた。

「誰かいるぞ。行ってみよう」

火を焚いていたのは、意外にもアルヴァニスタの調査隊、残留組の面々だった。彼らはクレスたちが伝説の勇者だと知ると火に当たっていくよう口ぐちにすすめ、舌が灼けるような沸かしたてのコーヒーをふるまってくれた。

「ここから北西にある洞窟はもともと鉱山の穴だったのですが、数年前にダオスが現れた際、山を破壊して潰してしまったんだそうです」

若い兵士のひとりが、北西の闇を指さす。

「そのときからこの町は暗闇に閉ざされたといわれています。しかし現在、ダオスに関する手がかりはなにもないんですよねえ」
年嵩の兵士は自嘲気味に言うと、宿の場所を教えてくれた。

「クレスさん、ちょっと」
兵士に聞いた宿の入り口で、ミントが袖を引っぱった。
「どうしたの、ミント」
ミントは、他の仲間が「寒い寒い」を連発しながら中へ飛び込んで行くのを目の端に捉え、すばやく囁いた。
「どうしてもお話しておきたいことがあるんです。この裏手で待ってますから、あとで来てくれませんか」
「え？」
「明日では私たちの命がどうなるかわかりません。どうしても今夜……お願い」
「あ、でも、こんなに寒くて……あっ、ミント？」
ミントは白い法衣をひるがえしながら宿屋の裏へ走って行ってしまった。
（どうしたんだろう……）

クレスはいったんクラースたちのあとを追って部屋に入った。
冗談のように大きなストーブが赤あかと燃えていたが、ほっとするどころではない。心はひどく騒いでいた。
「あれえ、ミントは？　ひょっとしてもうお風呂？」
アーチェが髪についた雪をタオルでごしごし拭きながら訊ねた。クレスはどきりとする。
「い、いや、えーと、散歩だってさ」
「えええっ、まじ？　このくそ寒いのに？　凍えちゃうじゃん」
クラースとチェスターも無言のままクレスに視線を当てた。
「そうだよな……ちょっと行ってくる」
クレスは仲間の視線を避けるように、部屋を飛び出した。
「なにあれ。いまさらな～にをごまかしてんのかしらぁ？」
アーチェはにっと笑い、濡れたタオルをベッドにぽいと放ると、チェスターにすり寄っていった。
「うふっ。おにいさん、あたしと雪だるま作んない？」
「ふざけろよ。ごめんだね」

チェスターは思いきり顔をしかめた。
「んなこと言わないで、はいはいはいっ」
「おいっ、やめ……!! 助けて、クラ——スっ！」
アーチェに押され、チェスターが廊下に消える。バタンとドアが閉められた。
「……」
クラースはしばらくあっけにとられていたが、やがい低く笑いだした。
「ふふ、若いってのはいいねえ……って私もまだ二十代だけどな……ふっ……」
（ミラルド……）
クラースは自分の時代のユークリッド村に残してきた恋人の名を心の中で呼びながら、ストーブの炎をじっと見つめた。その揺らめきが、心を掻き乱す。
（もし明日ダオスのしっぽをつかんだなら、明日を限りの命、か……）
クラースは振り返り、書き物机の上にクレスが置いて行った時間の剣を認めた。それから決心したように印を結ぶと、
「出でよ、オリジン！」
精霊を召喚する。オリジンが、すぐ目前に姿を現した。
『我があるじよ、なにか用か』

「おまえには未来や過去を見せる力があるか？」
『……ああ、時間の剣を使えばできるが……だが人間が未来を知ることは許されぬぞ？』
「じゃ、過去ならいいんだな」
クラースは鋭い目でオリジンを睨んだ。
『一度だけなら……な。で、いつの時代の、どこの、何が見たいのだ』
オリジンの問いに、クラースは一瞬絶句し、それから蚊の鳴くような声でなにごとかつぶやいた。
「……の、……の、…………を」
精霊は耳の後ろに手をやって懸命に聞きとろうとしていたが、ふいに笑いだす。
『わかったよ。恥じらう年でもあるまいに、おかしなことだな』
「うるさい」
クラースが机の前に座るやいなや、時間の剣が輝きはじめる。輝きはすぐに彼の目を覆い、時の彼方へといざなった。
クラースの家の大テーブルで、ミラルドは手製のテキストブックをパタンと閉じた。

向かい側には今日の生徒である子供がふたり。小さな男の子と女の子だ。
「はい、きょうの授業はここまでね」
「ありがとうございました」
「先生、クラースさんはいつ帰ってくるの？」
出口のところで女の子が訊ねた。
「さあ……いつかしらね」
子供たちを送り出してしまうと、ミラルドは窓際でヘアピンを抜き、長い髪を下ろした。
ほうっとため息が漏れる。
「何度も村のそばを素通りしているのはわかってるんだから……世界のために役立ったなら、その次はどうか私のために……。必ず無事で戻って、クラース」
ミラルドは睫毛を伏せ、一心に祈った――。
「おい、ほんとはあのふたりを覗くつもりなんだろ」
クレスのあとを追うようにして宿の外へ出たアーチェの肩を、チェスターがぐいと掴む。

「痛いなあ。いいじゃん、気になるんだもん」
「ったく、性格疑っちまうぜ。おまえみたいになにをしでかすかわからんやつは、誰かが鎖でもつけてしっかり持ってないと……」
「誰かって誰よ」
アーチェが睨む。
「さ、さあな。まあ、オレじゃないことは確かだが」
「はいはい、嫌われてるのはよーくわかってますよーだ」
「嫌いとは言ってないだろ！　オレは……まあいい」
チェスターは屈みこむと足元の雪をすくいあげ、
「ほらよ。作るんだろ、雪だるま」
と、アーチェの手に押しつけた。

舞い落ちる雪の中で、ミントは静かに座っていた。
煉瓦の壁に預けた背中やブーツの底からも冷気は忍び寄ってくるのだが、不思議とあまり寒さは感じない。
「ミント。待たせてごめん」

目になじんだブーツが、彼女の前でとまる。
「クレスさん」
「となり、いいかな」
クレスが雪の中に腰をおろす。肩と肩が触れ合った。
「話って？」
「これを見て……」
ミントは握っていた手を開こうとしてはじめて、かじかんでいることに気づいた。
「あっ、これは——！」
クレスは息をのんだ。窓からこぼれる明かりに浮かびあがったものは、ユニコーンの飾りのついたイヤリングだった。
「あの日、クレスさんと初めて出会った日——地下水路から出たあなたが落としたのを、拾って持っていたんです」
（そうだったのか……どこでなくしたのかと思っていたけど）
クレスは銀色に光るイヤリングをミントの手のひらからそっとつまみあげた。
「それはこの世にたったひとつしかない、私の母が身につけていた法術師の証……。私、すぐにわかりました。あのとき、母はもう……」

「……ごめん」
クレスは頭を垂れた。
「でも、僕を地下牢から出してくれたのは確かにミントのお母さんだった。きっとお母さんはきみを助けたくて、イヤリングを僕に渡してくれたんだと思う。いままで黙っていて、本当にごめん」
謝らないで、とミントは震える声で言った。
「あのとき母の死を聞かされていたら、取り乱してとても逃げきれなかったでしょう。私はただ、お礼が言いたかっただけなの。ウソをついてくれて……ありがとう」
「ミント……」
鳶色の瞳に、みるみる涙があふれ、こぼれ落ちた。
「本当にもう……なにも思い残すことなく戦えるわ」
「僕らは必ず勝つ。そうだろ、ミント」
クレスに覗き込まれ、むりやり笑顔を作ったミントが、「……ええ」と、頷く。
クレスは涙に濡れた柔らかな頬を、指でそっと拭ってやった。
「ミントったら、なんにも言ってくれないんだもん……」

煉瓦壁の陰からそっとクレスたちの様子を覗き見していたアーチェが、ぐすっと鼻を鳴らした。
「おい、そのくらいにしとけよ。また雪も降ってきたし、もう戻ろう」
「あん、もうちょっと……」
「いいから来いって。クラースさんが心配してるぞ」
チェスターは有無を言わせず、アーチェをひょいと小脇に抱えてしまう。
(なんて軽いんだ、こいつ……)
チェスターは驚いたが口には出さず、宿の入り口まで歩いた。
「ちょっと、離してよっ」
アーチェはチェスターの腕から逃れると、ドアのそばに小さな雪だるまをすえた。覗き見しながら作った手のひらサイズで、目鼻はない。
「顔は、あした一緒につけよ?」
「ああ」
アーチェはにこっとすると、ドアを押し開けた。
「クレス殿！　クレス殿はおられますか――!?」

早朝の宿に、緊迫した声が響き渡った。
浅い眠りを漂っていたクレスは、ハッと身を起こすと部屋のドアを開けた。外の冷気をまとった兵士がひとり、息を弾ませながら立っている。
「お休みのところ申し訳ありません。私はアルヴァニスタの調査隊情報部の者であります。仲間よりこちらにお泊りのはずと聞きまして……」
「どうした、なんの騒ぎだ？」
クラースも起きてきた。
「はっ。実は鉱山跡で巨大な城を見たという情報が入ったので、ご報告に参りました」
「巨大な城だって？」
クレスの頭はいっぺんにシャッキリとした。
「よし、行ってみよう！」
「ええ」
クラースとクレスは力強く頷きあった。
鉱山跡で見張りに立っていた兵は、クレスたちを見るなり敬礼して言った。
「調査隊から連絡を受けております。この先をしばらく行くと途中で山の中腹に出るの

ですが……城はそこから見えたのだそうです。ただし我々の調査が入る前の話でして……」
「怪しいよね」
アーチェが腕組みする。
一行は兵士が貸してくれたカンテラを持って、とにかくその場所まで行ってみることにした。
坑道は上りに傾斜していたが、破壊されたというだけあり、両脇に夥しい土砂や木枠の破片のようなものが寄せ集められている。クレスたちは足元に注意を払いながら黙々と進んだ。
やがて、唐突に視界が開ける。土砂を含んで吹きつけてくる風は、思いのほか強かった。
「ここ……でしょうか」
ミントは坑道から外へ足を踏み出すと、一面に広がる景色に呆然とした。
遥かに連なる荒涼とした山々――眼下には暗く渦巻く海が見える。そのすべてが闇に覆い尽くされているのだった。
「岬ってわけだな」

チェスターは風に飛ばされないよう足を踏んばりながら、暗いフィルターをかけたような景色を注意深く観察する。
「城なんてどこにもないぜ」
ああ、とクレスは首を捻り、
「でも、ルーングロムさんの話からすると、やっぱり見えない空間……時の狭間に城を隠してるんじゃないかな」
と推測した。
「そして、やつの操る魔物が出入りするときのみ姿を現す。目撃されたのはたまたまそんなときだった。と、そんなところだろう」
クラースはそう話をひきとると、クレスに、
「時間の剣を使ってみよう」
と言った。
「わかりました。うまくいくかどうかわからないけど」
クレスは岬の先端に立つと、エターナルソードを高くかざして叫んだ。
「時間の剣よ！　ダオスの城を時の狭間から引き出してくれ!!」
唸りをあげる強い風に、クレスの声はかき消されたかに思われた。が、数秒後、彼は

剣からの強い衝撃を確かに感じた。
「うわあっ!!」
「ああっ、見てっ！」
アーチェが前方を指さす。
エターナルソードから発せられた光が海の向こうまで届き、山々を明るく照らした。すると、今まで岩山だと思っていたある部分が歪み始める。
「し、城だっ」
チェスターは信じられないといった表情で、歪みが徐々に城をかたち作るのを凝視していた。やがて山々の稜線をはっきりと区切り、黒々とした城が姿を現した。
「こんなにうまくいくとは思わなかったが……」
クラースが帽子を押さえて唸る。
「どうやってあそこまでいくんだ？　いくらレアバードでもこの強風ではひとたまりもないだろう」
「あっ。クラースさん、見てください。剣がっ」
クレスは剣の刃が白く滲(にじ)むように輝くのを仲間に示そうとした。その瞬間、五人は光に包まれた。

気がつくと、クレスたちは見たこともない建物の中にいた。
「一体どうなってるんだ。ここは……」
「あっ、見てください。あそこ、いま私たちがいたところじゃあ？」
ミントは背後の窓から遥かに見えるちっぽけな岬に気づき、コクッと喉を鳴らす。
「ということは、ここはダオスの城の中か……」
でも以前の城とは違う感じだな、とクレスは思った。
「時を操る力に剣が共鳴して、呼び寄せられたのかもしれない」
クラースが言ったとき、窓の鎧戸がバタンと閉まった。
「誰だっ⁉」
「ヒヒヒヒヒヒィ……」
クレスたちの前に現れたのは、巨大なザクロにも似た魔物だった。皮膚全面に夥しい数の目がついており、中央のひときわ大きな目玉でバサバサと瞬きしている。
「よくここまで来られたものだなぁ。ヒヒヒィ、洗脳してやろう。貴様らもダオス様のしもべとなるがよいぃぃぃぃ……」
「きっしょく悪う！　こいつ、頭かち割れてるじゃん」

アーチェが吐き捨てるように言い、ほうきで魔物の上を飛びまわった。
「クレス、さっき見えた岬の位置からして、ここは城の下層階だろう。やつを探しながら上へ行ってみよう」
クラースはそう言うと印を結び、精霊を召喚した。
「ヴォルト！」
現れたヴォルトは魔物に体当たりして放電し、暗い広間を一瞬だが明るく照らし出した。
「あっちに階段があるぞっ」
チェスターが走る。しかし、そこへ有象無象のモンスターたちが湧き出て邪魔をした。
「ここは僕とチェスターで押さえます。クラースさんたちは早く上へ！」
クレスが手当たり次第にモンスターを斬り捨てながら叫ぶ。
「わかった。頼んだぞ！」
クラースたちが行ってしまうと、クレスとチェスターは顔を見合わせてニッと笑った。
「思い出すよな」
「ああ、狩りだろ？　ふたりでやろうぜ、また。あのときみたいによ」
「負けないよ——虎牙破斬っ！」

クレスはヴォルトの攻撃を受けてぶすぶすと燻(くすぶ)っている魔物に、剣を浴びせた。
「ヒイィィ――ッ！」
魔物は流れ出る自らの血で視力を失い、クレスの返す刃をまともに受けて倒れた。
チェスターが階段に足をかける。待ち受けていたモンスターを射抜きながら、駆け上がった。
「クラースさんたちはもうずいぶん先へ行ってしまったみたいだな」
「ああ、急ごうぜ」
クレスは窓からの風景が、一階上るごとに激変することに首を傾げた。さっきは山の連なりが見えていたのに、もう空の高みだけが広がっている。まるで、ものすごい速度で上昇している感じなのだ。
（時間だけじゃなく、距離の感覚もおかしくなりそうだ）
クラースたちの通った道は、モンスターの屍骸が示してくれている。クレスとチェスターは広大な城の中を上りつづけた。
どれくらいそんなことを繰り返しただろう。ようやくふたりは仲間たちに追いつくことができた。
「クラースさん！」

「おお、来たか」
クラースはほっとしたようにクレスたちを迎えた。
「この奥だよ」
と、アーチェが廊下の先を指さして言う。
クレスは黙って頷いた。

「ダオスっ！　そこにいるのかっ？」
重厚な扉を押し開き、クレスは叫んだ。
「あっ、これは!?」
勢いよく奥の間に踏み込んだ一行は、思わず身を縮めてしまう。そこには今まで上がってきた城の内部とは全く異なった空間が広がっていたからだ。
蜂の巣状の模様に仕切られた床は透明で、そこからつながって存在しているはずの壁や天井は見えない。信じられないことに、足下には表面に渦巻く雲を貼りつけた、青い惑星があった。
「あれは……月かしら」
ミントが前方にふたつ並んだ、大小の衛星を見つめて言う。

「どうなってるんだ、一体……」
クラースが呆然とつぶやいた、そのとき。それまでなにもなかった床の上に、ダオスが出現した。
「ふふふ、よく来たな。さすがは伝説の勇者だけのことはある」
金髪を波打たせたダオスの揶揄(やゆ)を含んだ不敵な笑みに、クレスはカッとなった。
「ダオス！　今度こそ決着をつけてやる。覚悟しろよ！」
「黙れ、下等な生命体が!!　この大いなる宇宙で私と戦おうというのか」
クレスは『なぜダオスがこの星に来たのか』というオリジンの言葉を思い出した。
(宇宙空間なのか……ここは……。いや、どこだって同じことだ！)
剣の柄を握りなおしたとき、突然ミントが数歩、ダオスに歩み寄る。
「待って！」
「ミント、危ないっ。さがるんだ」
クラースが鋭く制したが、ミントの耳には入らないようだった。
「なんだ。この期におよんで命乞いでもするつもりか？」
ダオスがくちびるを歪める。
「いいえ。聞きたいことがあるんです。あなたは前に、私たちとは戦う理由がないと言

いましたよね。なぜ……です？」
「そんなことか。簡単だ……お前たちが魔科学に携わる者ではないからだ」
ダオスは淀みなく答えた。
「魔科学はマナをことごとく使い果たしてしまう。私は魔科学を使う人間どもを抹殺しなければならないのだ――どうした、不満そうな顔をしているな。考えてもみるがいい。この私がミッドガルズを滅ぼさねば、今のユグドラシルはなかったのだぞ」
あっ、とミントが小さな叫びを漏らす。
「私はただ、マナの力が欲しいだけだ」
「そして世界を征服するんだろ」
チェスターが言うと、ダオスは露骨に肩をすくめてみせた。
「興味はないね、こんな星に。私には『大いなる実り』を手に入れるという使命があるだけだ」
「大いなる実り？　たとえどんな使命であってもおまえのしたことは許せない！　行くぞっ。やあぁぁぁぁぁ――――っ！」
クレスは剣を構え、床を蹴った。
「魔神千裂破っ！」

切っ先が上下に敵を刻む。
「うぬっ。させるかっ」
ダオスが腕を払うと、大きな爆発音が響き渡った。
「きゃあっ」
アーチェがほうきごと飛ばされそうになったが、なんとか体勢を立て直す。
「なにすんのさっ、危ないじゃん？」
ダオスをキッと睨み、
「ゴッドブレス！」
と叫んだ。今度はダオスが床に叩きつけられる番だった。
「うわあっ」
うつ伏せに転がった敵の隙だらけの背中に向かって、チェスターがすかさず弓を引く。
しかし、矢が刺さってもダオスは動かなかった。
「……や、やったのか？」
チェスターがうれしそうに声を震わせたとき、微かな笑い声が響いた。
「ふ……ふふふ……」
「ダオス!?」

「邪魔はさせぬ……わ、わたしを待ち望む十億の民たちのためにも……」
ダオスはゆらりと立ち上がり、クレスたちを睨めつける。それから両手を高くさしあげ、叫んだ。
「母なる星、デリス・カーラーンよ！　我の力を解放したまえ！」
ゴゴゴゴ……
「じ、地震か!?」
突然あたりが床が揺れだしたと思うと、次の瞬間、床が消えてなくなっていた。しかし、クレスたちが落下するようなことはなかった。
「ああっ、ダオスが……魔物に！」
美しい金髪はいまやおぞましい幾枚かの羽根となり、変容するダオスの輪郭を不気味にふちどっていた。
「死ね」
赤黒く裂けたダオスの口から強烈なレーザーが発射された。
「危ないっ！」
ミントがクレスに飛びつき、そのまま何回転も宙を転がる。もう上下の感覚はあてにならなかった。

クラースとアーチェが奇しくも同時に叫んだ。
「出でよ、イフリート！」
「ファイアストームっ！」
すさまじい炎がダオスの羽根を焼き尽くす。
「ぐわあああぁぁぁっ」
「くらえっ！」
チェスターがダオスの心臓に狙いを定めて弓を引いた。
「クレス、とどめを！」
「ああ。時空蒼破斬っ！」
繰り出す剣の先で、空間が歪んだ。クレスは、ひるむダオスの肉を斬る強い手応えを感じ、剣を薙ぎ払った。
「ぎゃあああああ――――っ！！！」
ばったりとあお向けに倒れたダオスが、ゆっくりと元の姿に戻ってゆく。
(やったな。仇をとる約束は果たせた)
クレスとチェスターは、しっかりとお互いの目を見つめあった。
「くっ……た、頼む……」

「なんだ？　命乞いすることになったのはおまえのほうだったな」
クラースが笑うと、ダオスは微かに首を振り、
「わ、私はもう放っておいても死ぬ。その前に、聞いてほしい……我が民の希望、ここに絶たれたり。私の願い、民の祈り……閉ざされたり。母なる星デリス・カーラーンよ、破滅の籤を引いた私を……どうか……」
と、喘いだ。
ダオスの瞳孔は開き、すでに命が消えかかっているのは明白だった。
ミントはダオスにそっと近づくとひざまずき、静かに語りかけた。
「教えてください……あなたがなんのために孤独な戦いを続けていたのか」
「……」
ダオスのくちびるが微かに動きはじめた。

さやさやと葉擦れの音が落ちてくる。
ダオス城での戦いを終えたクレスたちは、大樹ユグドラシルのもとまでやって来ていた。柔らかな下草の上に思い思いのかっこうで座り、話し込んでいる。

「みんなは信じられるのか……ダオスの星が破滅の危機にあって、それを救うために戦っていたなんて。これじゃ僕たちが十億もいるという民を殺したみたいじゃないか」
クレスは草をむしって、力まかせに投げた。
やけになっちゃいけない、とクラースは冷静に諭した。
「やつだってさんざん人間を殺している。だから仇討ちだったんじゃないのか？　私たちにだって、譲れないもの、守るべき人がある——それを信じてここまできたんだ。違うか」
クレスは黙ってうつむいた。
ユグドラシルの緑の葉が一枚、ひらひらと舞い落ちた。ミントはそれを拾ってくちづけ、枝の高みを見上げる。
「デリス・カーラーンは危機を脱するために、この樹のマナから生まれるという『大いなる実り』を待っていたんですね」
きらめく木洩れ陽の中に、精霊マーテルの姿が見えた気がした。
「どんなんだろうね、『大いなる実り』って。マナがものすごくいっぱいないとダメなんでしょ？　魔科学なんかやってたら、いっぱいどころか樹が枯れてたじゃんね。そうだ」
アーチェは、ぱちんと手を叩いた。

「ミッドガルズの人たちを襲う前に、ダメもとで訳を話してみれよかったんだよ。しばらく研究を中止してくれたかも、でしょ」
「ははっ、そりゃまたいかにもおまえらしい発想だな」
チェスターが笑った。
「とにかく、研究者たちには悪いが、魔科学なんてなくたって人間が生きていけるってのは事実だな。魔法が使えないのは残念だが……」
クラースは、ミントに視線を当てた。彼女は軽く頷き、立ち上がる。
「では、ユグドラシルの周りにマナの流出を防ぐバリアーをはります。いつかきっと『大いなる実り』が生まれるように……。みなさん、下がっていてください」
クレスたちも立ち上がると、大樹を遠巻きにした。
「信念を持って孤独な戦いを続けたあいつへの、せめてものたむけだ。ミント、やってくれ」
はい、と答えたミントは、ユグドラシルに向かって杖を振った。
「バリアー！」
まばゆい光のベールが大樹を包み込み、やがて静かに幹や枝に吸い込まれるように消える——。

「終わったな」
「……」
「もう役目はすんだんだ。帰らなければならないな……」
「ええ」
クレスは、やっと自分の中で心が折り合いをつけるのを感じながら、クラースに頷いてみせた。
「時間の剣よ！　僕の時代へ！」
エターナルソードをかかげ、クレスが声を張る。
輝きとともに消え去る五人の姿を、ひとりマーテルが高みから見送っていた。

トーティス村は、まだダオスの手の者による悲劇の爪あとを生々しく残していた。
だが、復興を急ぐ村人たちの顔は明るい。
クレスたちはわずかな時間を共にしただけで、新たな別れをむかえることになった。
南の森の入り口で、五人は最後の時を惜しんでいた。
「それじゃあ、時間の剣のことはよろしくお願いします」

クレスはクラースにエターナルソードを手渡した。
「わかっている。私が責任を持って封印しよう」
そのとき、アーチェがヒステリックな声をあげた。
「みんなっ、あたしはバイバイなんて言わないからねっ！」
「アーチェさん」
ミントがそっと涙を拭う。
「泣かないでよぉ、ミント……もう会えなくなるわけじゃなし」
アーチェも瞳をうるうる潤ませている。
「でも、でもっ。百年後にしか会えないなんてっ。さみしすぎるよおぉぉ～！」
子供のように声をあげて泣き出したアーチェに、ミントはまた涙した。
「百年か。私はとっくに墓の下……もう二度と会えないな」
「クラースさん……」
クレスはぎゅっとくちびるを噛んだ。
「はは、気にするな。おまえたちに出会えただけでもよかったと思ってる。無限の時の中にあって、ほんのささやかな時間を共有することがどんなに貴重ですばらしいことなのか、よくわかったよ……ミントもチェスターも、元気でな。行くぞ、アーチェ」

クレスはふと、さっきからチェスターが静かなのに気づいた。彼はひとり、みんなに背を向けて突っ立っていた。
「おいチェスター、もういいのか」
クレスが声をかけると、仏頂面で振り向く。そしてまだ泣いているアーチェのところまで歩いていくと、涙でぐちゃぐちゃになった顔を覗き込んだ。
「ひでー顔」
「……！」
「ウソだよ。そんなに泣くな」
「……うん」
「またな」
「……うん。あのさ……」
アーチェは鼻をすすると、上目遣いにチェスターを見つめた。
「とけちゃったかな、もう。あの雪だるま……」
チェスターが、ふっと笑み崩れる。
「バーカ。またこんど一緒に作ってやっから」
チェスターはアーチェの頭をぽんぽんと叩くと、薄い肩をクラースのほうへ押しやっ

た。

「時間の剣よ！　私たちの時代へ！」

クラースとアーチェが光に包まれる。

クレスは、いまこのとき自分の両脇にミントとチェスターがいてくれることを、心の底から幸福に思った。

エピローグ

夕闇の中で、ミラルドは微笑んでいた。
「……しばらくはここにいられるんでしょう？」
ドアを後ろ手に閉めたクラースは、首を振る。
「しばらくだって？　神に土下座されたって、もうどこへも行くもんか」
「お帰りなさい……！」
クラースはミラルドをしっかりと腕の中に抱きしめた。

アーチェはローンヴァレイの家に戻って以来、ちょくちょく水鏡ユミルの森を訪れるようになった。

ま新しい手袋。ほうきにつけた小さな人形。
未来から持ち帰った母の愛情と一緒に上空を一回りするだけで、いまは満足だった。
（二百年もすれば、あたしもここに入れるようになるよね。でも……その前にひょっとして、ばったり会えるかもしれないじゃん？）
湖面ぎりぎりに急降下すると、のんびり泳いでいた魚たちがさっと逃げる。
アーチェは声をあげて笑った。

大樹ユグドラシルのすぐそばに、ミントの母の墓ができた。
クレスがなにより先にとチェスターの手を借り、作ったものだった。
ミントが、道ばたで摘んできた花を墓の前にそっと置く。
「頑張って村を建て直さなきゃな」
クレスが言った。傍らのチェスターは「ああ」と頷き、
「あいつはいまごろどうしてるんだか」
と、腕組みをした。

「大丈夫、元気にやってるさ。いままで僕ら、過去は死んだもの、未来はまだ生まれていないものだと思ってきたけど、それは違うな」
「うん。アーチェも同じ時間を過ごしてる。絶対会いに行こうぜっ」
墓の前にひざまづいていたミントが、微笑みながら振り返った。
「私も、連れて行ってくれますか？」
「もちろん！」
クレスとチェスターが同時に返事をしたとき、ちょろちょろっと木立ちの中を横切る猪の姿が見えた。
ふたりが見合わせた顔から、ぱっと輝きが満ちあふれた——。

——・——・——・——・——・——・——

夜の明けきらぬ森で、いまようやく『大いなる実り』が生まれようとしていた。
精霊マーテルはユグドラシルを見守りながら、南の方角にちょっと手をあげる。

風が起きた。

と、美しい金髪の男が大樹の根元に横たわる——。

城で力尽きたダオスの亡骸だった。

マーテルは、すーっと下に降り立つと、天を仰いだ。

「聖なる大地、聖なる宇宙、聖なる神よ！　その慈悲深き御心、罪深き者に祝福を与えん。『大いなる実り』よ、いまここに！」

ユグドラシルの幹が微かに震える。そこからゆっくりと露出してくるものを、マーテルは母のまなざしで見つめた。

それは巨大な果実のようでもあり、種子そのもののようにも見えた。

『大いなる実り』は完全に大樹から離れると、真下に横たわっている男と同化する。

「さあ、行きなさい！」

マーテルの言葉に、ダオスと一体になった『大いなる実り』は上昇を始めた。

母なる星をめざすうち、ふとダオスは自分が目覚めていることに気づく。みなぎる力はマナのそれに違いなかった。

遥か下界からマーテルが自分を見上げているのが感じられたが、やがてそれは青い星

となり、輝く点となって、消えた。
――もう眠ってもいいのだな……。
ダオスは、ゆっくりと目を閉じた。

『テイルズ　オブ　ファンタジア　はるかなる時空(とき)』完

あとがき

『テイルズオブファンタジア～はるかなる時空(とき)～』が完結しました。
なにを隠そう、今回はスケジュールがなかなかどうしてきつく、限られた時間と格闘していたら心臓がバクバクしてきて、焦りました。
友人にきいたら「そりゃ睡眠不足でしょ」とのことだったのですが……情けないことです。体だけは丈夫だったのになあ。
ところで、みなさんは勉強や仕事のときに音楽って聴きますか？
いわゆる「ながらなんとか」っていうやつですが、私はちょっと前までこれが全然ダメ。シーンとしたところでしか書けなかったんです。
でも、ひょんなことから歌詞が日本語でなければ問題ないということがわかって。
つまり、日本語だと意味がわかりすぎるので感情移入してしまい、聴き流せなくなっ

ちゃうのですが、語学力がいまいちなためアジア・ヨーロッパものなどはぜんぜんオッケー、だったのです。

というわけで、これを書いているときは『eRa』というCDをよく聴いてました。特にヴァルハラ戦役のあたりで。

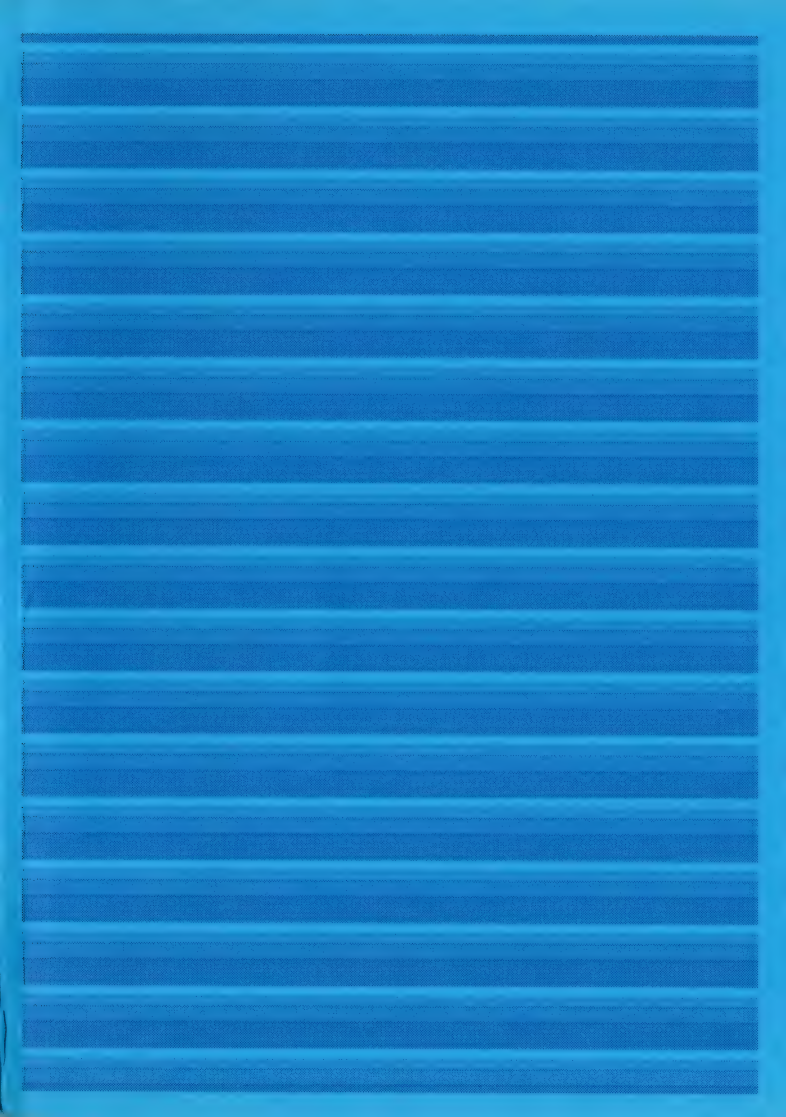
まあ、要するに私は不器用なんですよね。いま思い出したけど、中学のときの同級生で速いピアノを弾きながら、その曲のリズムをまったく無視して足をブラブラさせてる子がいて、いまだにびっくりです。彼女はきっと邦楽聴きながら手紙書いて、電話もできちゃうのかもしれない。人間にはふたつのタイプがあるということです。

クレスたちはと考えると、わりと器用なのはモリスンさんくらいかなという気がするんですが、どうでしょう。あ、モリスンさんというのは三人出てきますが、現代の地下墓地で復活(?)した、トリニクス(私の中では通称トリニクス・D=大好き・モリスン)のことです。彼はCD聴かないでしょうけどね。

心臓バクバクもおさまったいま、上・下巻通して書いてみての感想は……やっぱりすずはもうちょっと登場させたかったですね。彼女はたとえばチェスターにとっては、すごく妹性(?)の強い女の子なので、そのへんまで書きたかったなあと思います。

あとは、もちろんクレスとミントの今後の行方にも興味があるし、アーチェが昔つきあっていたらしい彼のことも、実はすんごく気になっていたりします。……というわけで、次は外伝を書くことになりそうです。
誰の、どんなお話になるのかはまだ??ですが、どうぞお楽しみに。
最後になりましたが、いつもたくさんお手紙をいただき、ありがとうございます。
お返事が遅れぎみで申し訳ないのですが、懲りずにまたご感想など聞かせてやってくださいね。ではまた。

矢島さら

一九九九年一月

矢島さらの著作リスト

テイルズ オブ デスティニー
運命(とき)をつぐもの 上 下

テイルズ オブ デスティニー
青の記憶

テイルズ オブ ファンタジア
はるかなる時空(とき) 上 下

ISBN4-7572-0323-3

C0193 ¥640E

定価 本体640円 +税

発行○アスキー
発売○アスペクト

主人公・クレスたちは、迫り来るダオス戦にそなえて、ミッドガルズ城につめていた。極秘の作戦会議の結果、ミッドガルズ軍に加わり、ヴァルハラ平原にてダオス軍を迎え撃つことになった。国王より同軍・第4特殊部隊の指揮官に任命されたクラースは、クレス、ミント、アーチェとともに、ダオス陸軍部隊長・イシュラント率いるモンスター軍団に戦いを挑む。